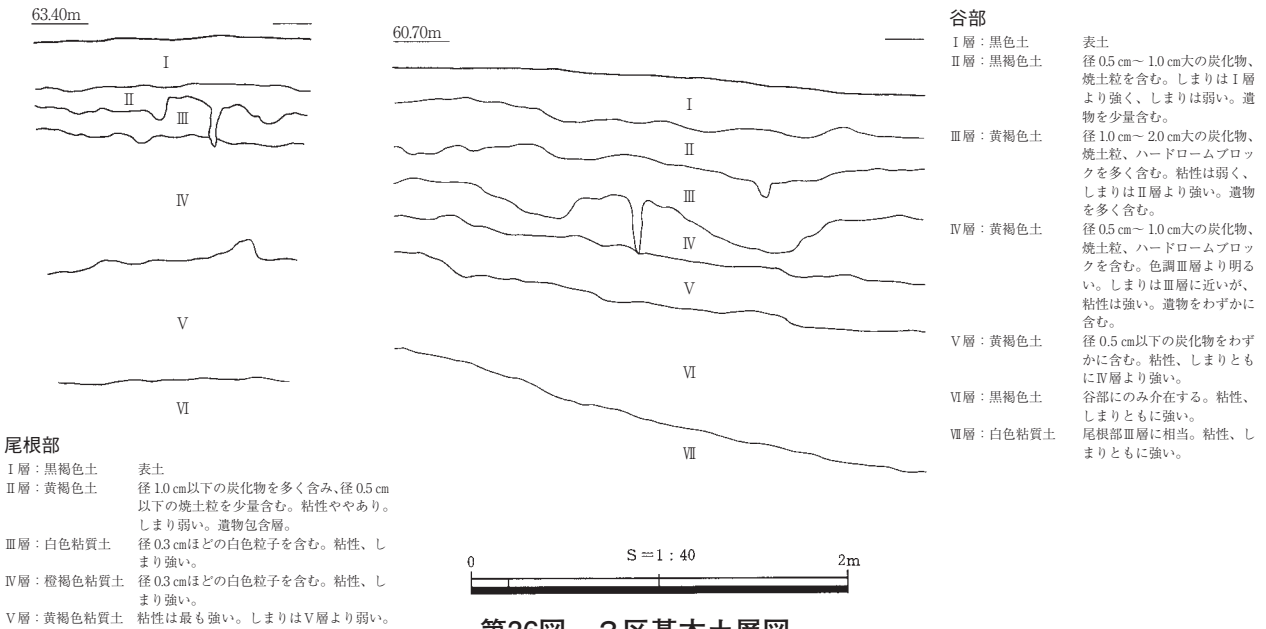


## 第4章 調査の成果（3区）

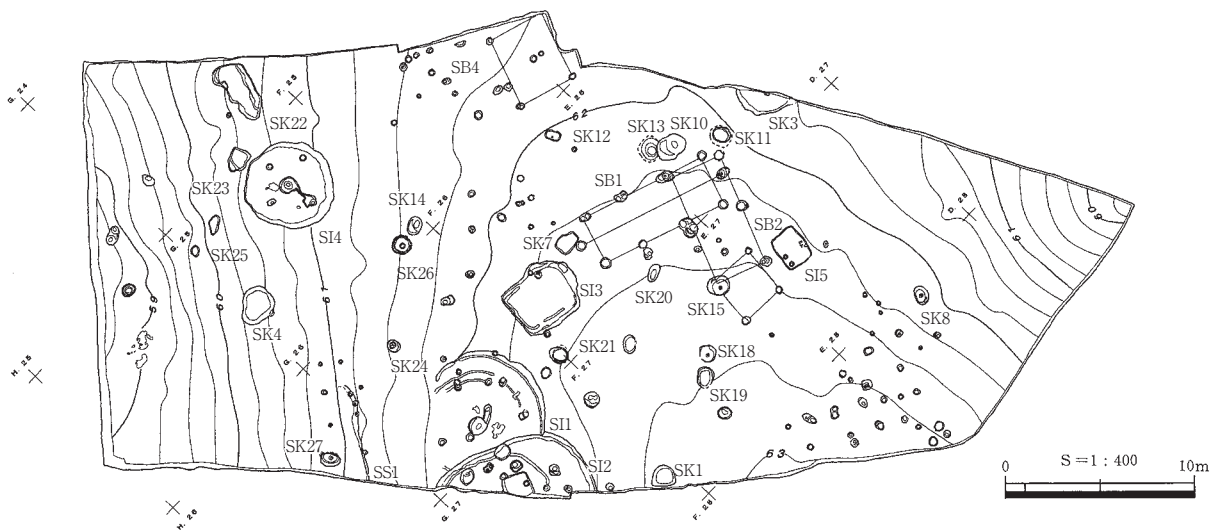
### 第1節 遺跡の立地と層序

3区は最高部の標高63mを測る丘陵尾根部と、それを挟む東西の谷部である。尾根部は北方向へ舌状に伸び、谷部に向かって緩やかに傾斜する。そのため調査区内では平坦面と呼べる地形は少ない。

尾根部と谷部の基本層序を第36図に示した。ともにI層は表土である。遺物包含層は尾根部はII層（黄褐色土）、谷部はII層（黒褐色土）、III層、IV層（ともに黄褐色土）である。谷部で主に遺物が出土したのはIII層である。尾根部の遺構はII層中でも検出したが、遺構埋土と似ていることもあり、III層上面まで掘り下げて確認したものもある。これまで調査された周辺遺跡での基本層序から、尾根部のII層とIII層の間にソフトローム、ホーキ層、ATなどが介在すると思われたが、本地点では確認されなかった。



第36図 3区基本土層図



第37図 3区遺構配置図

## 第2節 調査の成果

### (1) 概要

検出した遺構は、竪穴建物（註1）5棟、段状遺構1棟、掘立柱建物4棟、落とし穴8基、貯蔵穴2基、土坑11基である。

竪穴建物には円形プランで、中央ピット、柱穴等があり住居跡の可能性が高いものと、小型の方形プランで、柱穴や壁溝等が明確なセットとならないなど、住居以外の用途が考えられる二者が存在する。いずれも丘陵頂部ではなく、谷部に向かう緩斜面部に築かれている。

掘立柱建物は独立棟持柱を有する3間×1間のもの（SB1）、2間×1間のもの（SB2）、1間×1間のもの（SB3）、調査区外に広がるため規模が不明なもの（SB4）がある。SB1とSB2は直交する形で重なるが、柱穴の切り合い関係からSB1が新しい。

落とし穴は1m以上の深さで、底面に小ピットをひとつ持つものである。形状や大きさが似通っており、同時期に築かれたと思われるが、遺物を伴うものはなかった。

貯蔵穴は、袋状土坑と呼ばれるフラスコ形の掘り込みを有するものである。

これらの遺構のうち、時期が特定できるものはすべて弥生時代中期後葉である。

遺物は土器、土製品、石器、鉄器がある。土器は弥生時代後期前半の甕が若干あるが、ほとんどが口縁部外面に凹線文を施す弥生時代中期後葉のものである。壺、鉢、高坏もあるが数は少なく、大部分は甕である。特異なものとして壺の頸部に意匠不明の線刻がある絵画土器がある。土製品としては分銅形土製品が2点出土している。

石器で目立ったものはサヌカイトを素材とした石鏃製作に関わる資料である。素材剥片に両極剥離を加えて形を整え、石鏃に仕上げるものである。これらについては詳述する。

鉄器も10点出土している。平成17年度に調査した1区も弥生時代中期後葉の集落跡で、10棟の竪穴住居を確認しているが、鉄器は4点出土したのみである。

註1) 規模や構造から住居と特定しにくいものを含むため、ここでは竪穴建物と呼称する。

### (2) 竪穴建物

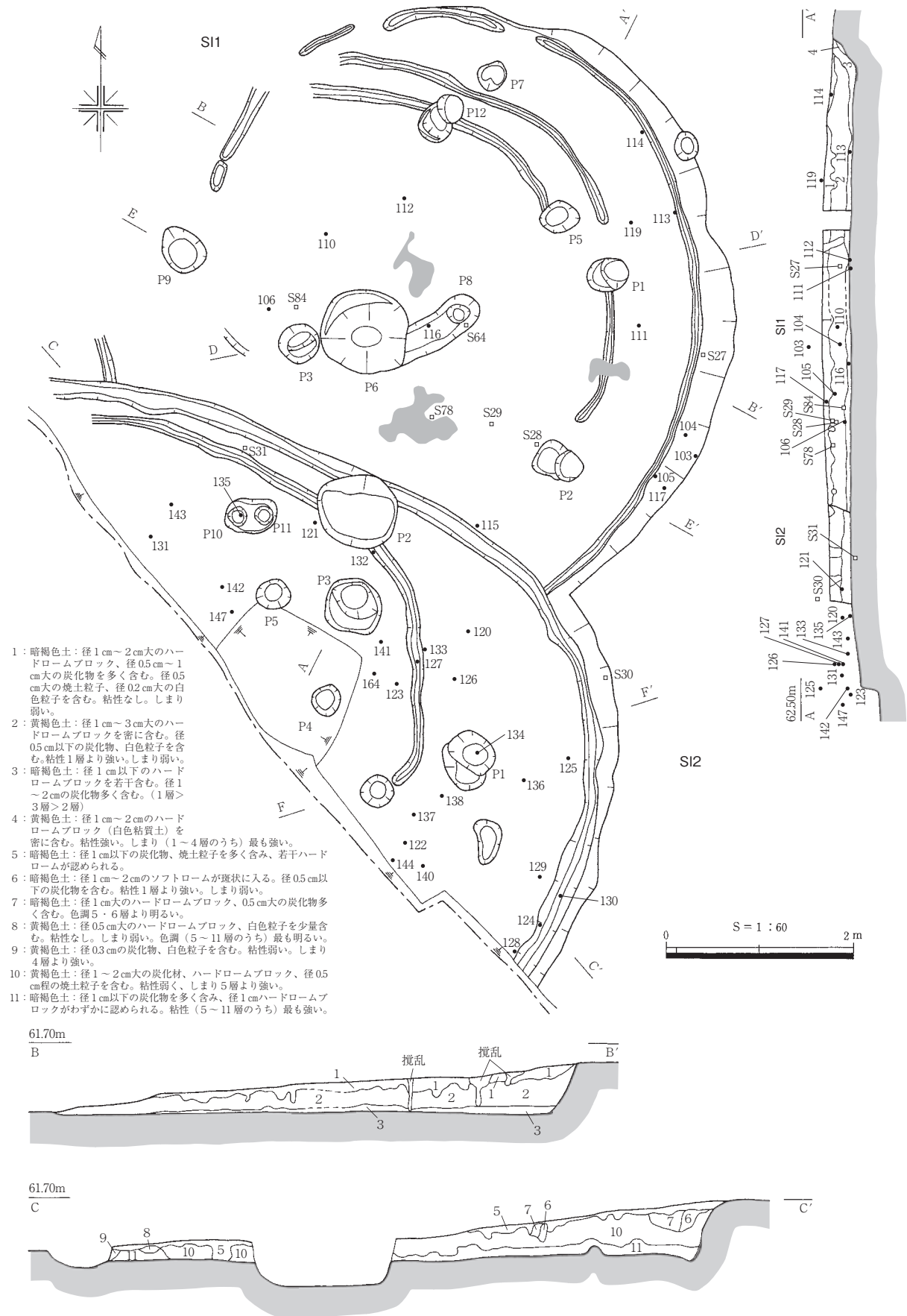
#### SI1（第38～40・42・86～88図、表15・16・25・28・29、PL.19・21・33～35・45～48・50）

調査区中央の南壁寄りに位置する。標高62m前後の西側に傾斜する斜面部に築かれており、南側をSI2に切られている。谷部側となる西側は壁や壁溝が残っていなかった。

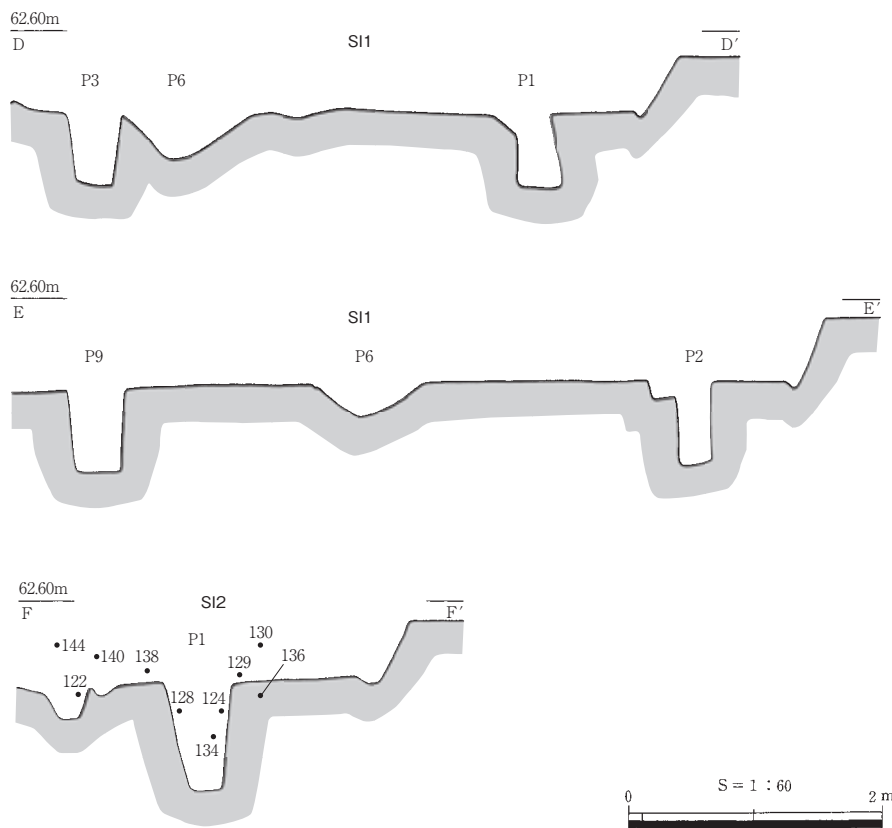
壁溝の状況から2回の建て替えがあったと思われる、最終的には平面形が円形で、残っている部分から推定すると径7m程度の住居に拡張されたと思われる。深さは残りのよかった東側で50cmであった。

拡張後の住居の支柱穴はP1、2、9、10、12で、支柱穴間距離はP1から時計回りに2.4m、3.4m、2.8m、3.3m、2.4mを測る。柱穴はおおむね径40cm程度で、深さは最大で床面から60cmである。

床面中央に径1mほどの中央ピットP6がある。北側の一部が二段掘りとなるが、約40cmの深さを持つすり鉢状を呈する。中央ピットの東西にP3、8がある。P8は中央ピットにつながる浅い溝が伴う。中央ピット周辺及びP1とP2の間に、不整形に広がる焼土を検出している。貼床は確認していない。



第38図 SI1・2(1)



第39図 SI1・2(2)

埋土は大きく3層に分かれる。斜面の傾斜に沿うように堆積しており、住居廃絶後の自然堆積と考えられる。

遺物は床面から埋土上層にかけて出土した。111と113が床面出土、107が3層出土の土器である。上下に拡張した口縁部外面に2条の凹線文を施し、内面体部下半はヘラケズリにより調整される。弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)に位置づけられよう。埋土中から出土した土器も同様の時期である。石器は

伐採石斧S27と砥石S28、S29を凶化した。このほかに打製石庖丁、小型の板状剥片、板状剥片に両極剥離を加えたもの、石鏃未製品、石鏃が出土している。すべてサヌカイト製で、本住居内で石鏃製作が行われていたことが分かる。サヌカイトについては金山産の可能性が高いという分析結果が得られている。(第5章第2節)

### SI2 (第38・39・41・42図、表15・16・28・29、PL.20・21・36・37・46・48・50)

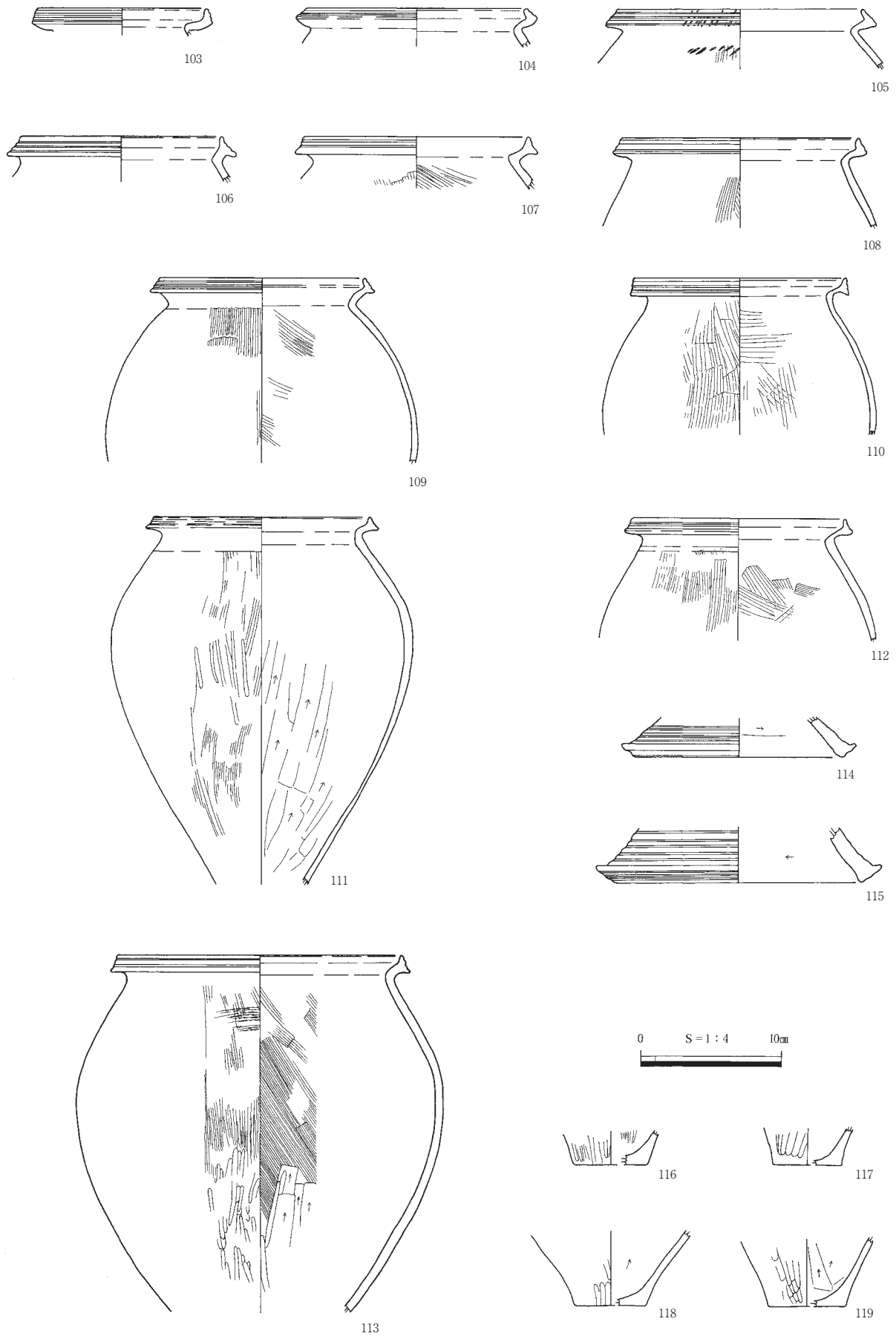
SI1を切って築かれている。住居の西から南部分は調査区外に広がる。

壁溝の状況から1回の建て替えが確認できる。形状や規模は不明だが、検出した範囲で想定すると、拡張後は径7mから8mの隅丸方形であった可能性がある。SI1同様、谷に向かう西側部分の残りは悪く、東壁で50cmの深さを確認した。

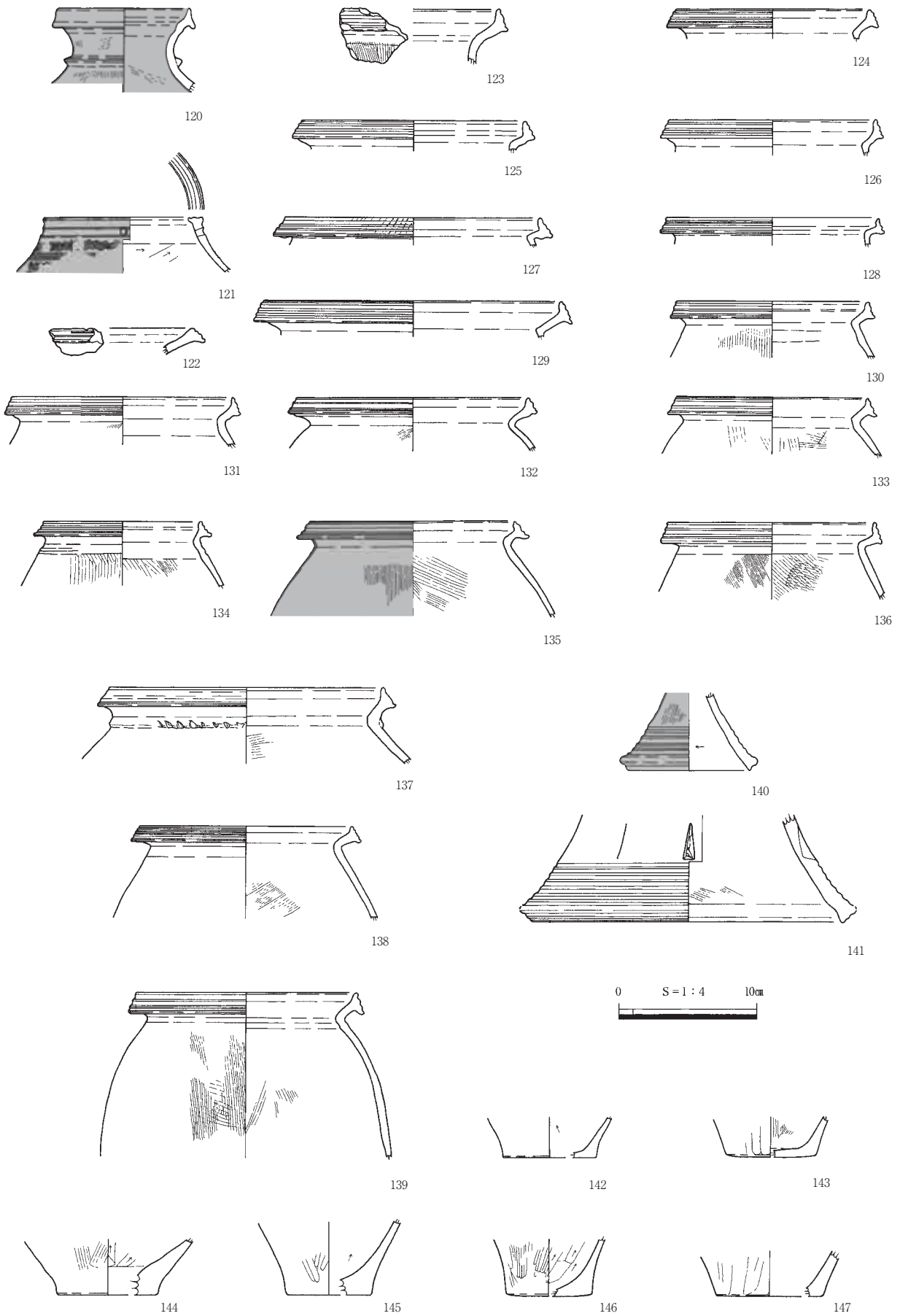
拡張後の主柱穴としてP1、P3があり、両者の距離は2.1mである。柱穴は径50から60cmを測り、P1は深さ80cmであった。

埋土は斜面の傾斜に沿うように堆積しており、住居廃絶後の自然堆積と考えられる。

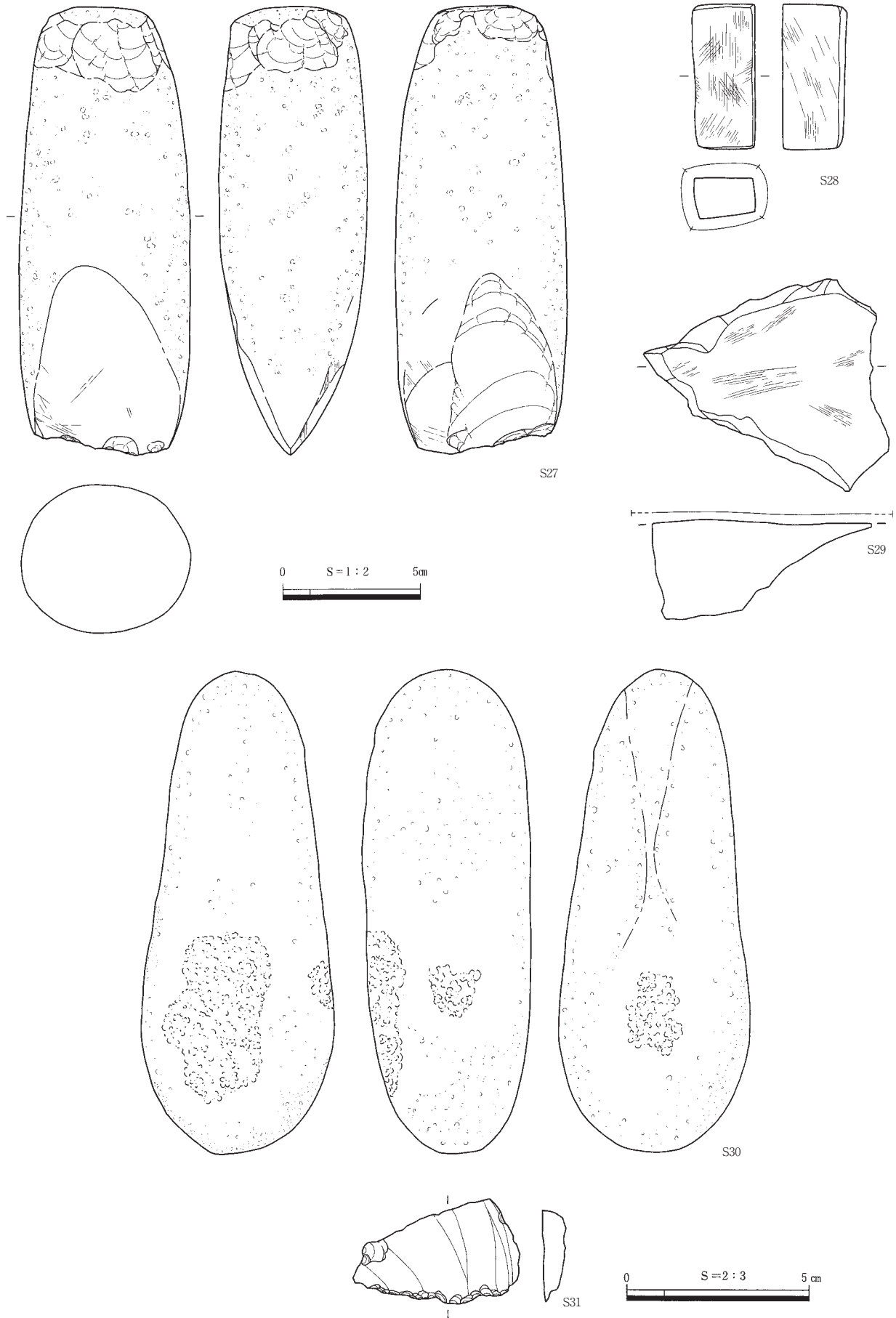
遺物は128が床面のほかは、埋土中からの出土である。底部を除いて123、124、131、133が埋土でも下層の7層から出土した。いずれも口縁部ないしは肩部までの資料であるが、上下に拡張された口縁端部に3条の凹線文を施す。120から122は壺。120は頸部に貼り付け突帯が巡る。121は無頸壺。口縁端部に凹線文を施すほか、口縁直下を波状文と直線文で飾る。137の頸部には指頸圧痕文を施した突帯が巡る。SI2出土土器は、確認できる範囲では内面頸部までヘラケズリが及ぶものはないので、SI1同様弥生時代中期後葉(IV-2からIV-3)に位置づけられる。S30は敲石で、丸みを帯びた棒状の礫の側面に広く敲打痕が見られる。



第40図 S11 出土遺物



第41図 SI2 出土遺物



第42図 SI1・2出土遺物

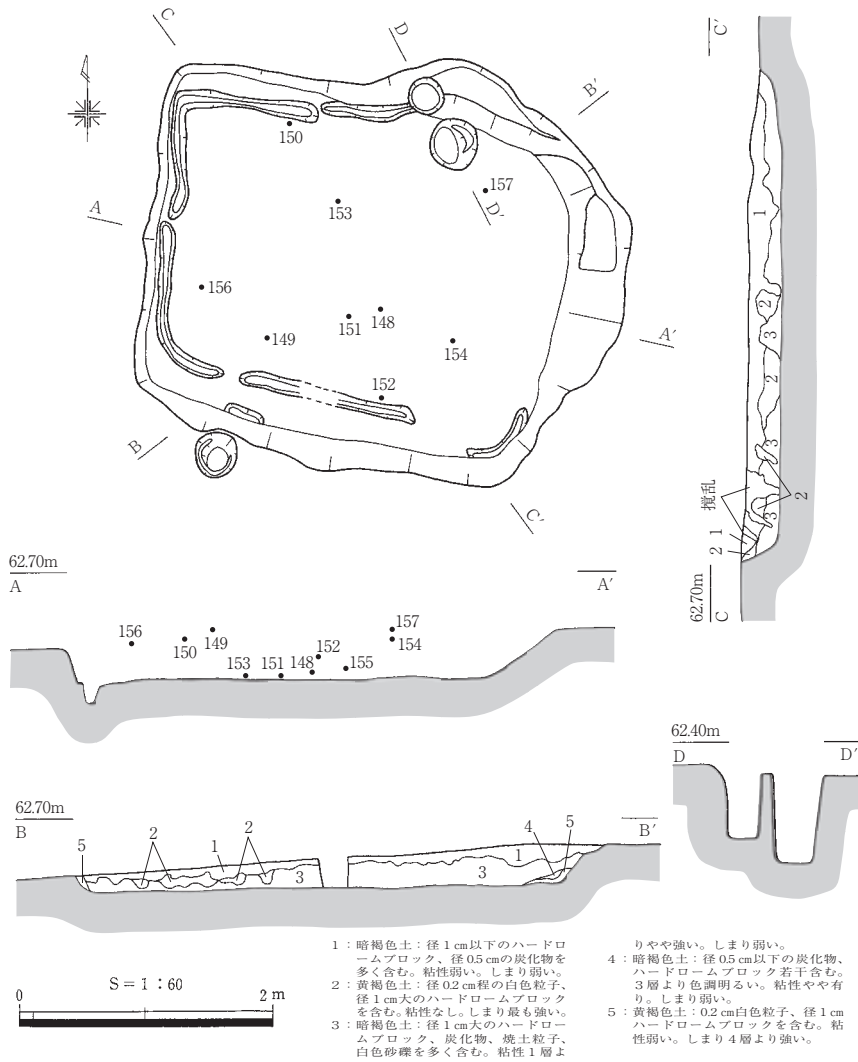
表15 S11・2出土土器観察表

遺物No	遺層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No
103	S11 埋土	弥生土器 壺	※123 △1.95	口縁部 破片	外面：口縁部3条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		404
104	S11 埋土	弥生土器 甕	※158 △2.7	口縁～頸部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		418
105	S11 埋土	弥生土器 甕	※142 △5.8	口縁～体部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部～体部ハケ→刺突 内面：口縁～体部ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		417
106	S11 埋土	弥生土器 甕	※144 △3.1	口縁～頸部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		467
107	S11 埋土	弥生土器 甕	※160 △3.7	口縁～体部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：灰黄褐～浅黄褐色	良好		504
108	S11 埋土	弥生土器 甕	※168 △6.3	口縁～体部 破片	外面：口縁部2条凹線文、体部ハケ 内面：口縁～体部ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		389
109	S11 埋土	弥生土器 甕	※142 △5.8	口縁～体部 破片	外面：口縁～体部風化により調整不明 内面：口縁～体部風化により調整不明	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐～橙色 内面：にぶい黄褐～橙色	良好		284・346・428
110	S11 埋土	弥生土器 甕	※148 △13.0	口縁～体部 1/3	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部上半ナデ、下半ケズリ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		449・509
111	S11 埋土	弥生土器 甕	※152 △11.0	口縁～体部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1.5mm以下の白・黒・赤色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		508
112	S11 埋土	弥生土器 甕	※152 △8.6	口縁～体部 1/3	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		434
113	S11 埋土	弥生土器 甕	※200 △25.5	口縁～体部 1/2	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁ナデ、体部ハケ	径2mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄褐～にぶい黄褐色	良好		507
114	S11 埋土	弥生土器 高坏	底径※146 △2.85	脚部 破片	外面：脚部5条凹線文 内面：脚部ケズリ、裾部ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		344
115	S11 埋土	弥生土器 高坏	底径※17.6 △3.9	脚部 破片	外面：脚部5条凹線文、裾部3条凹線文 内面：脚部ケズリ→ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1148
116	S11 埋土	弥生土器 甕・壺?	底径※5.2 △2.4	底部 破片	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部ハケ、底面ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：褐灰色 内面：黒褐色	良好		445
117	S11 埋土	弥生土器 甕・壺?	底径※4.8 △2.6	底部 破片	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部～底面ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：黄褐色 内面：灰黄褐色	良好		408
118	S11 埋土	弥生土器 甕・壺?	底径※5.0 △5.3	底部 破片	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部ケズリ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		288・488
119	S11 埋土	弥生土器 甕・壺?	底径※5.4 △4.9	底部 破片	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部ケズリ、底面ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		342
120	S12 埋土	弥生土器 壺	※9.6 △6.0	口縁～体部 1/6	外面：口縁部ナデ、頸部貼付突帯、ハケ→ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径2mm以下の白・黒色砂粒	外面：明黄褐色 内面：橙色	良好	内外面赤色塗彩	581
121	S12 埋土	弥生土器 無頸壺	※11.6 △4.0	口縁～体部 破片	外面：口縁部1条凹線文、口縁部2条凹線文、聯指波状文、聯指文 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	内外面赤色塗彩	555
122	S12 埋土	弥生土器 壺	※1.9 △1.9	口縁部 破片	外面：口縁部3条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		601
123	S12 埋土	弥生土器 甕	※3.9 △3.9	口縁部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：にぶい褐色	良好		575
124	S12 埋土	弥生土器 甕	※14.2 △2.1	口縁部 破片	外面：口縁部4条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		649
125	S12 埋土	弥生土器 甕	※16.4 △2.1	口縁部 破片	外面：口縁部3条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		593
126	S12 埋土	弥生土器 甕	※15.2 △2.5	口縁～頸部 破片	外面：口縁部3条凹線文 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：橙色	良好		580
127	S12 埋土	弥生土器 甕	※18.6 △2.0	口縁部 破片	外面：口縁部3条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		572
128	S12 埋土	弥生土器 甕	※15.6 △2.0	口縁部 破片	外面：口縁部3条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	外面ス付着	669
129	S12 埋土	弥生土器 甕	※21.8 △2.6	口縁～頸部 破片	外面：口縁部4条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ナデ	径1.5mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	外面ス付着	642
130	S12 埋土	弥生土器 甕	※14.0 △4.0	口縁～体部 1/6	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ?	径1.5mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		630
131	S12 埋土	弥生土器 甕	※16.2 △3.5	口縁～体部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ?	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：明黄褐色 内面：橙色	良好		516
132	S12 埋土	弥生土器 甕	※17.0 △3.8	口縁～体部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ?	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	良好		563
133	S12 埋土	弥生土器 甕	※14.0 △4.1	口縁～体部 1/6	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		577
134	S12 埋土	弥生土器 甕	※11.6 △4.7	口縁～体部 1/6	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1.5mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：黒褐色	良好		672
135	S12 埋土	弥生土器 甕	※15.0 △6.9	口縁～体部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	良好	内外面赤色塗彩	557
136	S12 埋土	弥生土器 甕	※15.2 △5.6	口縁～体部 1/6	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	良好		612
137	S12 埋土	弥生土器 甕	※20.0 △5.4	口縁～体部 破片	外面：口縁部凹線文、頸部貼付突帯、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：明黄褐色 内面：黄褐色	良好		600
138	S12 埋土	弥生土器 甕	※15.6 △6.6	口縁～体部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ・ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		599
139	S12 埋土	弥生土器 甕	※16.0 △11.7	口縁～体部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ?	径1.5mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐～黄褐色	良好		624
140	S12 埋土	弥生土器 高坏	底径※8.9 △5.5	脚部 破片	外面：脚部ハケ・5条凹線文、裾部1条凹線文 内面：脚部ケズリ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	外面赤色塗彩	602
141	S12 埋土	弥生土器 高坏	底径※22.8 △7.7	脚部 破片	外面：脚部透孔、7条凹線文、裾部2条凹線文 内面：脚部ケズリ・ハケ、裾部ナデ	径1.5mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		571
142	S12 埋土	弥生土器 甕・壺?	底径※6.7 △2.9	底部 破片	外面：底部ナデ、底面ナデ 内面：底部ケズリ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		537
143	S12 埋土	弥生土器 甕・壺?	底径※6.6 △2.9	底部 破片	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部ハケ、底面ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄灰色 内面：浅黄褐～黄灰色	良好		515
144	S12 埋土	弥生土器 甕・壺?	底径※7.2 △4.0	底部 破片	外面：底部ハケ、底面ナデ 内面：底部ケズリ、底面ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		596
145	S12 埋土	弥生土器 甕・壺?	底径※6.1 △5.3	底部 破片	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面：浅黄色 内面：橙色	良好		391
146	S12 埋土	弥生土器 甕・壺?	底径※6.2 △4.1	底部 破片	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部ケズリ、底面ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐～黄灰色	良好		574
147	S12 埋土	弥生土器 甕・壺?	底径※7.8 △3.3	底部 破片	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		539

表16 S11・2出土石器観察表

No	挿図・PL	遺構・地区 層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取上No	備考
S27	第42図 PL.47	S11 埋土	石斧		16.1	6.2	5.4	870.0	400	
S28	第42図 PL.46	S11 埋土	砥石		5.2	1.5	2.3	26.4	427	
S29	第42図 PL.46	S11 埋土	砥石		8.8	3.5	3.6	150	474	
S30	第42図 PL.48	S12 埋土	敲石	安山岩	17.4	7.0	6.1	950.0	590	
S31	第42図 PL.46	S12 埋土	スクレイパー	黒曜石	2.9	4.55	0.65	9.0	523	産地分析試料No24





第43図 SI3

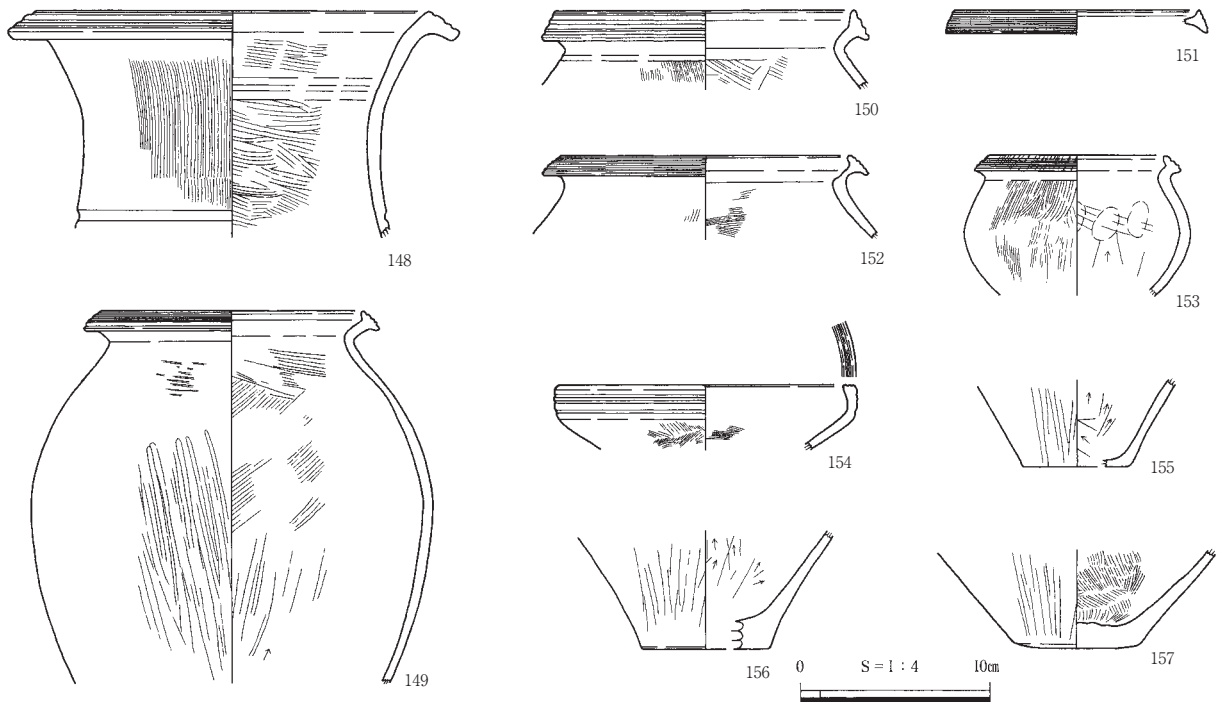
SI3（第43・44図、表17、PL.22・37・38）

SI1の東に近接して位置する。長径3.8m、短径3.4mのややいびつな方形を呈する。谷に向かう西側部分には残りが悪く、東側で深さ40cmを測る。

東側を除いて幅10cm程度の壁溝が巡る。残りのよかつた部分では20cm弱の深さがある。

建物の内外にピットが三つあるが、規則的に並んでいない。

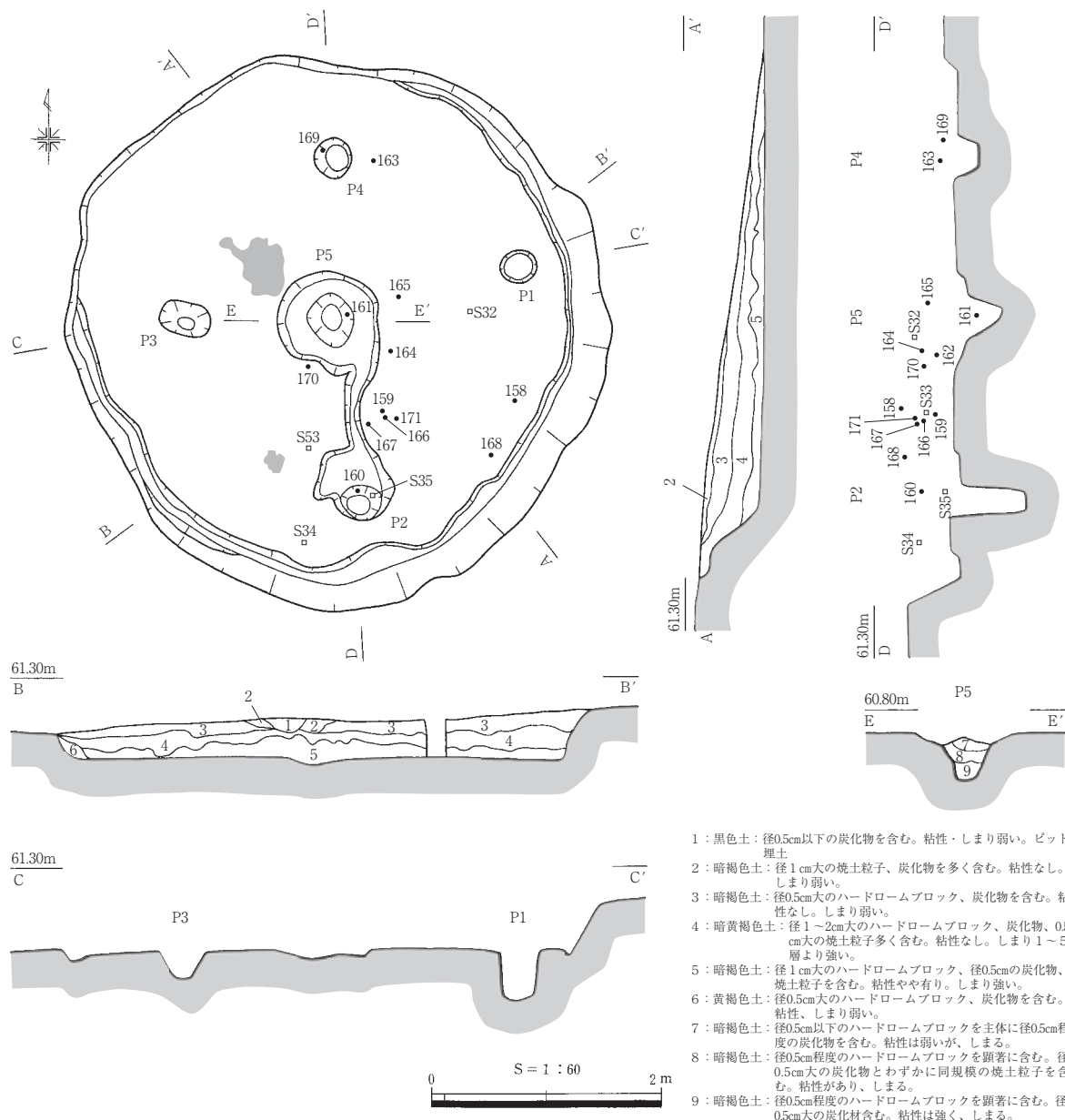
出土した土器は第44図に示した。SI3はこれらの土器から、弥生時代中期後葉（IV-2からIV-3）に位置づけられる。また規模や構造から、住居以外の用途が考えられる。



第44図 SI3出土遺物

表17 SI3出土土器観察表

遺物№	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上№
148	SI3埋土	弥生土器壺	※20.6 △11.8	口縁~頸部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ハケ・ナデ、1条凹線文 内面：口縁部ナデ、頸部ハケ・ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		132
149	SI3埋土	弥生土器甕	※14.0 △19.5	口縁~体部 1/3	外面：口縁部4条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ・ミガキ 内面：口縁~頸部ナデ、体部上半ハケ、体部下半ケズリ	径2mm以下の白・黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		116・129
150	SI3埋土	弥生土器甕	※17.9 △4.1	口縁~体部 1/6	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁~頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色~褐灰色 内面：褐灰色	良好		99
151	SI3埋土	弥生土器甕	※13.1 △1.2	口縁部 破片	外面：口縁部5条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	良好		155
152	SI3埋土	弥生土器甕	※15.4 △4.3	口縁~体部 破片	外面：口縁部5条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁~頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：明黄褐色 内面：にぶい橙色	良好		127
153	SI3埋土	弥生土器甕	※9.4 △7.3	口縁~体部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁~頸部ナデ、体部上半ハケ・指オサエ、体部下半ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：にぶい黄褐色	良好	体部スス付着	115
154	SI3埋土	弥生土器高坏	※14.8 △3.4	口縁~頸部 破片	外面：口縁部2条凹線文、口縁部3条凹線文、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：灰黄褐色 内面：浅黄色	良好		137
155	SI3埋土	弥生土器甕・壺?	底径※5.5 △5.5	底部 破片	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰黄褐色 内面：にぶい褐色	良好		126
156	SI3埋土	弥生土器甕・壺?	底径※6.7 △6.2	底部 破片	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部ケズリ、底面ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		114
157	SI3埋土	弥生土器甕・壺?	底径※6.6 △5.2	底部 破片	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：オリーブ褐色 内面：明赤褐色	良好		92・101



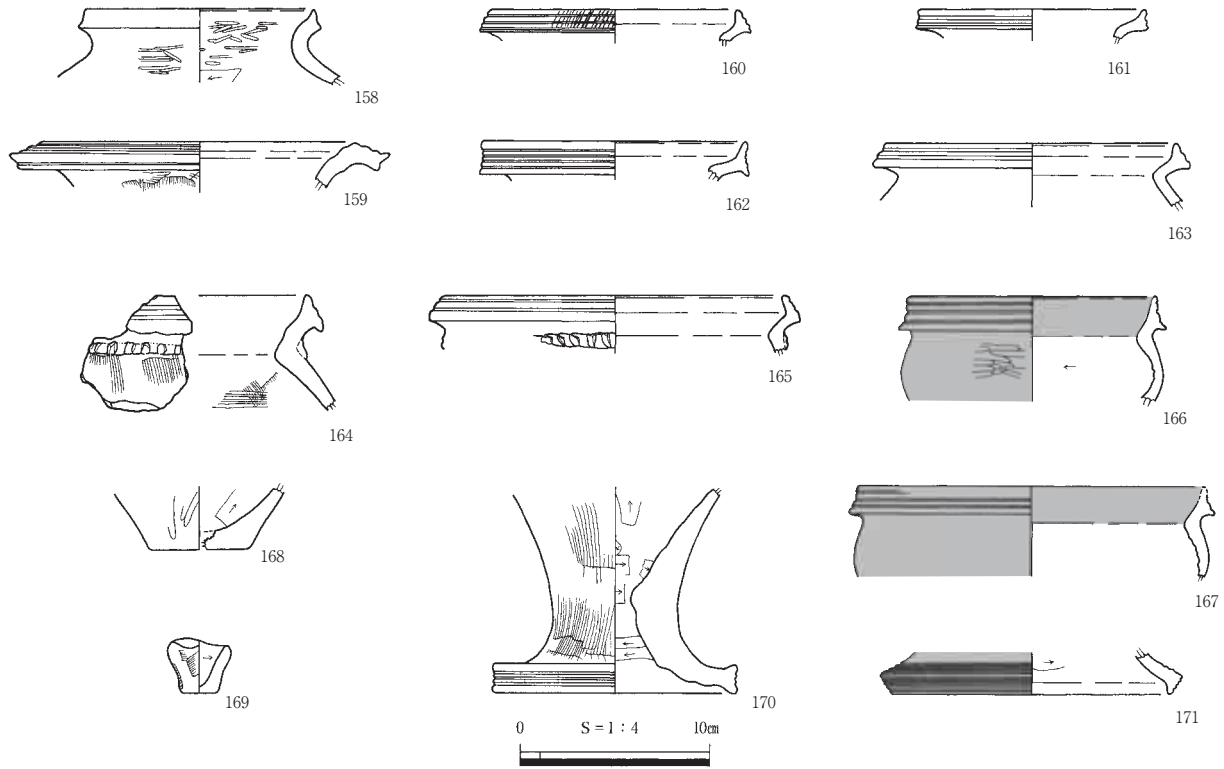
第45図 SI4

SI4（第45～47・86図、表18・19・25・28・29、PL.23・40・45・46・49・50）

今回検出した竪穴建物の中では最も谷側に築かれている。他のものが標高62mのコンターライン沿いに位置するのに対し、SI4は標高61m前後に築かれていた。

長径4.8m、短径4.6mの円形を呈し、深さは南側で50cmを測る。谷に向かう北側から北西側の残りは悪く、壁の立ち上がりがほとんど検出できない部分もあった。建て替えは行われていない。

東西南北方向にほぼ軸を合わせて柱穴P1からP4が確認された。それぞれの間隔は、P1から時計回りに2.5m、2.2m、1.9m、1.8mである。



第46図 SI4出土遺物（1）

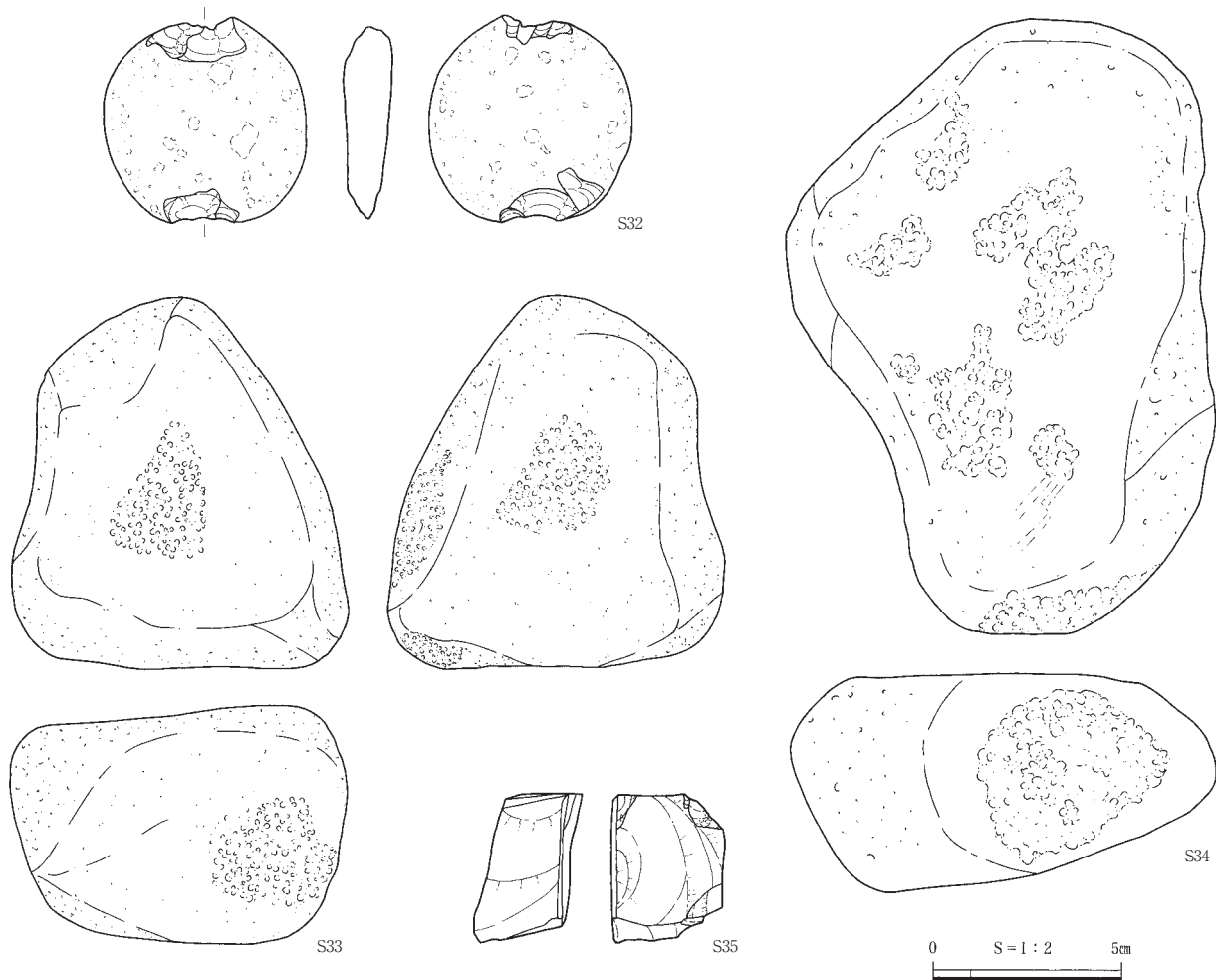
表18 SI4出土土器観察表

遺物No	遺層	構位	器種	口径(cm)	器高(cm)	部位	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No
158	SI4	埋土	弥生土器 壺	※12.2	△3.9	口縁～体部	破片	外面：口縁部ナデ、頭部ナデ、体部ミガキ 内面：口縁～頭部ミガキ、体部ケズリ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	良好		703
159	SI4	埋土	弥生土器 壺	※16.4	△2.4	口縁～頭部	破片	外面：口縁部2条凹線文、頭部ハケ→ナデ 内面：口縁～頭部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：暗灰黄～にぶい黄橙色	良好		769
160	SI4	埋土	弥生土器 壺	※13.2	△1.6	口縁部	破片	外面：口縁部3条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	良好		725
161	SI4	埋土	弥生土器 壺	※12.0	△2.0	口縁部	破片	外面：口縁部2条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：灰黄褐色	良好		893
162	SI4	埋土	弥生土器 甕	※13.2	△2.0	口縁部	破片	外面：口縁部4条平行沈線 内面：口縁部ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	良好		760
163	SI4	埋土	弥生土器 甕	※15.2	△3.2	口縁～体部	破片	外面：口縁部2条凹線文、頭部～体部調整不明 内面：口縁～体部ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		810
164	SI4	埋土	弥生土器 甕	—	△5.9	口縁～体部	破片	外面：口縁部2条凹線文、頭部貼付突帯、体部ハケ 内面：口縁～頭部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄褐色	良好		773
165	SI4	埋土	弥生土器 甕	※17.4	△3.0	口縁～頭部	破片	外面：口縁部2条凹線文、頭部貼付突帯 内面：口縁～頭部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		786
166	SI4	埋土	弥生土器 甕	※13.8	△5.4	口縁～体部	1/6	外面：口縁部3条平行沈線文、頭部ナデ、体部ミガキ 内面：口縁部風化のため調整不明、体部ケズリ	径1.5mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：褐色	良好	内外面赤色塗彩	764
167	SI4	埋土	弥生土器 甕	※18.3	△4.4	口縁～体部	破片	外面：口縁部3条平行沈線文、頭部ナデ、体部ハケ→ナデ 内面：口縁～体部風化により調整不明	径3mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：黒褐色	良好	外面赤色塗彩	752
168	SI4	埋土	弥生土器 甕・壺?	底径※5.0	△3.2	底部	破片	外面：底部ミガキ、底面ナデ 内面：底部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	良好		701
169	SI4	埋土	弥生土器 ミョウ土器	2.2	2.7	口縁～底部	完形	外面：口縁～体部ハケ、底面ナデ 内面：口縁～底部ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：明黄褐～にぶい黄褐色	良好		808
170	SI4	埋土	弥生土器 器台	底径※13.6	△11.7	脚部	1/8	外面：脚部ハケ、裾部3条平行沈線文 内面：脚部ケズリ、裾部ケズリ→ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：褐色	良好		753
171	SI4	埋土	弥生土器 器台	底径※15.6	△2.2	脚部	破片	外面：脚部ナデ・3条平行沈線文、裾部4条平行沈線文 内面：脚部ケズリ、裾部ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：褐灰色 内面：にぶい黄褐色	良好	外面赤色塗彩	763

建物の中央には径80cm程の中央ピットが認められる。掘り込みは2段掘りとなっており、中心の40cm×50cmの範囲が深くなり、床面から40cm掘り込まれている。中央ピットの埋土は、掘りすぎたため上部については不明だが、中心部分ではほぼ水平に堆積する3層を確認した。焼土ブロックや炭化物粒を含むものの、建物の埋土に比べて顕著というわけではない。

建物自体の埋土は他の竪穴建物と同様、斜面の傾斜に沿うように堆積しており、住居廃絶後の自然堆積と考えられる。

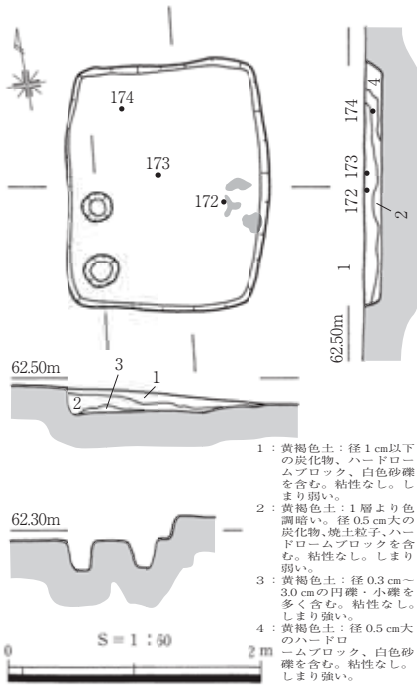
遺物はほとんどが埋土中からの出土である。図示した土器のうち、162、163及びミニチュア土器の169は埋土下半の4層から出土したものである。S32は扁平な円礫の上下を打ち欠いた石錘。S33、S34は敲石である。S35は床面直上から出土した硬質緑色凝灰岩製の管玉製作に関わる直方体素材である。擦り切りによる分割を行っている。S I 4は出土した土器から弥生時代中期後葉（IV-2からIV-3）に位置づけられる。



第47図 S14出土遺物(2)

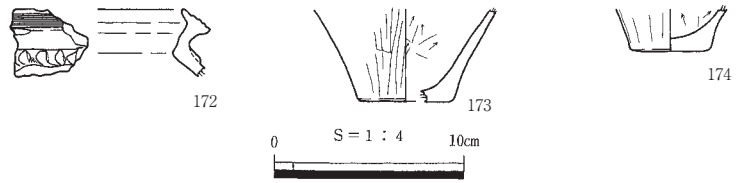
表19 S14出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区 層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取土No.	備考
S32	第47図 PL.45	S14 埋土	石錘	安山岩	5.0	5.45	1.3	48.2	713	
S33	第47図 PL.49	S14 埋土	敲石	安山岩	9.80	9.0	6.3	6400	748	
S34	第47図 PL.49	S14 埋土	敲石	安山岩	16.1	11.40	5.7	1190	719	
S35	第47図 PL.46	S14 埋土	管玉製作に伴う素材剥片	緑色凝灰岩	4.00	3.0	2.9	39.2	829	



第48図 SI5

- 1: 黄褐色土: 径1cm以下の炭化物、ハードロームブロック、白色砂礫を含む。粘性なし。しまり弱い。
- 2: 黄褐色土: 1層より色調暗い。径0.5cm大の炭化物、焼土粒子、ハードロームブロックを含む。粘性なし。しまり強い。
- 3: 黄褐色土: 径0.3cm~3.0cmの円礫・小礫を多く含む。粘性なし。しまり強い。
- 4: 黄褐色土: 径0.5cm大のハードロームブロック、白色砂礫を含む。粘性なし。しまり強い。



第49図 SI5出土遺物

SI5（第48～49図、表20、PL.24・40）

東側谷部を臨む標高62.5m付近に築かれている。長径2m、短径1.6mの方形で、深さは20cmを確認した。当初は土坑と認識していたが、小さいながら整った方形であることや、東側床面に焼土が認められることなどから、竪穴建物とした。西側床面で並列するピットを2基検出している。

埋土中から出土した土器のうち172は、口縁部外面に凹線文を施し、頸部には指頭圧痕文突帯を巡らす。こうした遺物からSI5は弥生時代中期後葉（IV-2、3）に位置づけられる。

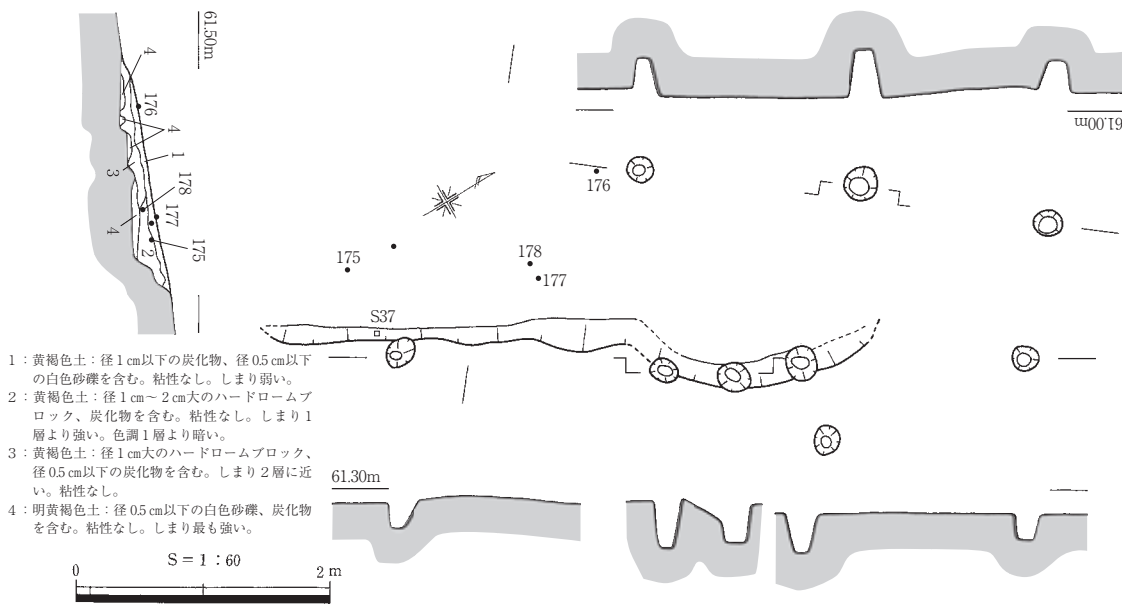
表20 SI5出土土器観察表

遺物No.	遺層	器種	口径(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No.
172	SI5埋土	弥生土器 甕	— △3.5	口縁~頸部 破片	外面: 口縁部4条凹線文、頸部貼付突帯 内面: 口縁~頸部ナデ	径1mm以下の白・赤色砂粒	外面: 橙色 内面: 橙色	良好		841
173	SI5埋土	弥生土器 甕・壺?	底径※5.1 △4.8	底部 破片	外面: 底部ミガキ、底面ナデ 内面: 底部ケズリ、底面ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面: にぶい黄褐色 内面: にぶい黄褐色	良好		847
174	SI5埋土	弥生土器 甕・壺?	底径※4.1 △2.2	底部 破片	外面: 底部ミガキ、底面ナデ 内面: 底部ケズリ、底面ナデ	径3mm以下の白色砂粒	外面: にぶい黄褐色 内面: 褐灰色	良好		848・865

(3) 段状遺構

SS1（第50・51・88図、表21・22・29、PL.25・39・45・46・50）

SI1、2の西側に近接した、標高61m付近に築かれた遺構である。南側は調査区外に延びるので全体の規模は不明であるが、約5m幅を検出した。段状にカットされた平坦面の奥行きは2mほどである。

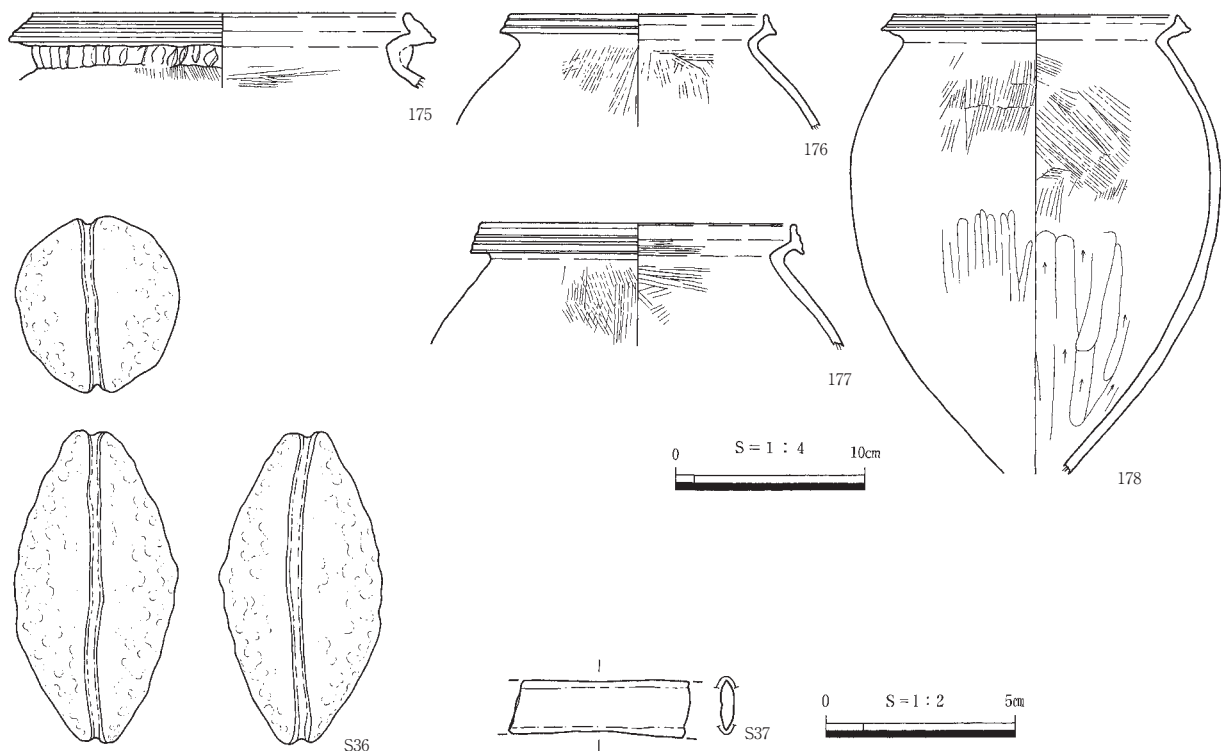


- 1: 黄褐色土: 径1cm以下の炭化物、径0.5cm以下の白色砂礫を含む。粘性なし。しまり弱い。
- 2: 黄褐色土: 径1cm~2cm大のハードロームブロック、炭化物を含む。粘性なし。しまり1層より強い。色調1層より暗い。
- 3: 黄褐色土: 径1cm大のハードロームブロック、径0.5cm以下の炭化物を含む。しまり2層に近い。粘性なし。
- 4: 明黄褐色土: 径0.5cm以下の白色砂礫、炭化物を含む。粘性なし。しまり最も強い。

第50図 SS1

カットされた周辺には、いくつかのピットが存在する。軸がそろっているものもあるが、平坦面との位置関係などから、この段状遺構に伴う建物の柱穴と断定するには至らない。

第51図に出土遺物を掲げた。いずれも口縁部外面に凹線文を施す。内面頸部までヘラケズリは及んでいない。175は頸部外面に指頭圧痕文突帯を巡らす。178は底部を除き復元できたもので、口縁端部の拡張は弱く、体部下半から底部に向かい急激にすぼまる。これらの土器はいずれも弥生時代中期後葉（IV-2からIV-3）に位置づけられる。S36は砲弾状に整形した礫の長軸に沿って1条の溝を巡らせる石錘。S37は石鋸である。S I 4出土の擦り切り溝を有する直方体素材とともに、この時期の管玉製作技法の一端を示している。



第51図 SS1出土遺物

表21 SS1出土土器観察表

遺物No	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No
175	SS1 埋土	弥生土器 甕	※20.0 △3.9	口縁～体部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部貼付突帯、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：明黄褐色	良好		329・1871・1878
176	SS1 埋土	弥生土器 甕	※15.8 △5.9	口縁～体部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1808・1812
177	SS1 埋土	弥生土器 甕	※16.8 △6.2	口縁～体部 1/6	外面：口縁部2条平行沈線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、頸部～体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1815・1851
178	SS1 埋土	弥生土器 甕	※15.0 △24.2	口縁～底部 1/2	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部上半ハケ、下半ミガキ 内面：口縁～頸部ナデ、体部上半ハケ、体部下半ケズリ	径1.5mm以下の白・黒・赤色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1817・1819・1820・1821・1833・1852・1853・1872・1846

表22 SS1出土石器観察表

No	挿図・PL	遺構・地区 層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取上No	備考
S36	第51図 PL.45	SS1 埋土	石錘		8.2	4.4	4.5	150.0	1801	
S37	第51図 PL.46	SS1 埋土	石鋸	結晶片岩	4.75	1.5	0.4	5.6	1847	

(4) 掘立柱建物

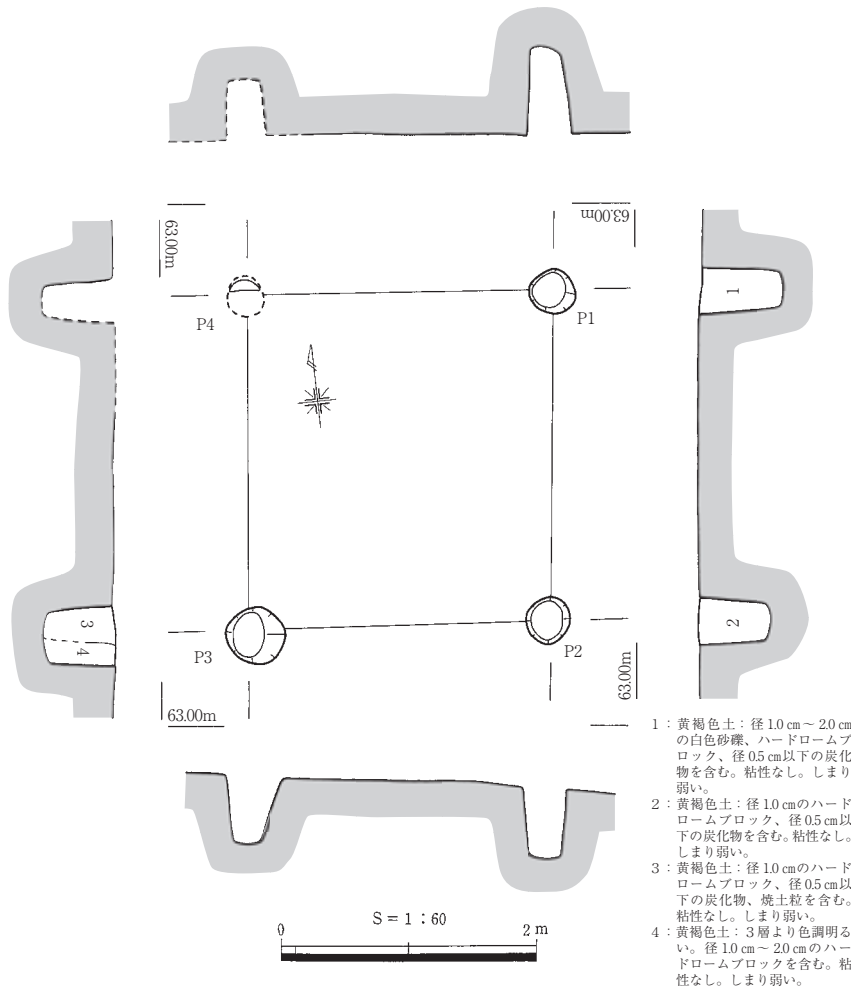
SB1 (第52図、巻頭図版2、PL.26)

丘陵頂部の平坦面が北に向かい舌状に延びる部分の、標高62.5m付近に位置する桁行3間、梁行1間の掘立柱建物である。N-70°-Wに主軸を取り、丘陵が延びる方向とは直交して建てられている。コンターラインに沿って、平坦な地形を選んだものであろうか。









第54図 SB3

係があったとすれば、やや規模を大きくし、新たに棟持柱を設けた建物に、主軸を変えて建て直されたことになる。

遺物は伴っていないが、調査区内の遺構、遺物の時期が弥生時代中期後葉にほぼ限定されるので、この時期の可能性が高いと思われる。

**SB2（第53図、PL.27）**

SB1と切り合う桁行2間、梁行1間の掘立柱建物である。N-24°-Wに主軸を取る。

前述のとおり桁行の長さは6.1mであり、SB1に比べやや小さい。先に調査したSK15と重なってP4が位置するためP4の形状

や規模等は不明である。そのためP4にかかる部分は推定となるが、柱間距離は、桁方向がP1からP6の順に2.9m、3.2m、3.1m、3.0mで、梁方向はP1-P6間が2.8mである。

柱穴の埋土は地山を含む黄褐色土である。断面観察からは柱根痕跡を明確に捉えることはできなかった。

SB2も遺物を伴っていないので明確な時期は不明だが、SB1と同様の理由で弥生時代中期後葉の遺構と考えておく。P5がSB1のP6に切られるため、SB1より古い建物である。

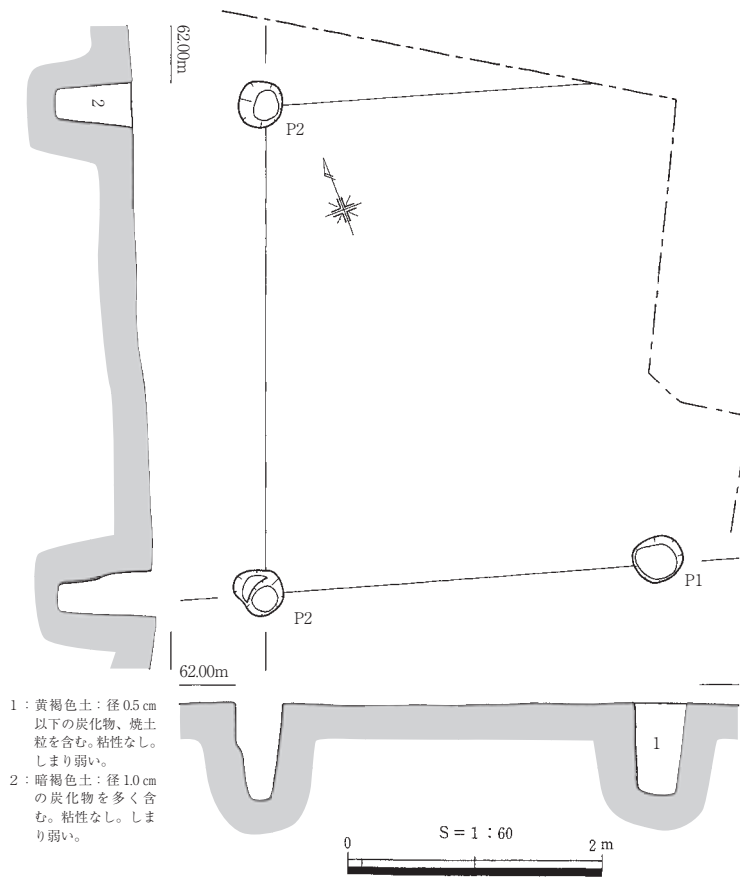
**SB3（第54図）**

SB2と重なって検出した、桁行、梁行ともに1間の掘立柱建物である。周辺を精査してもこの建物につながる柱穴は検出できなかった。

柱間距離は、P1-P2間、P3-P4間ともに2.6m、P1-P4間、P2-P3間ともに2.4mである。このため前者を桁方向、後者を梁方向と判断した。その結果、主軸方向はN-5°-Eとなり、これはSB2の主軸とはずれている。

P4はSK15と重なっている。SK15の調査終了後にSB3の存在を認識したため、P4は北側の一部を明らかにできただけである。

柱穴の埋土は地山を含む黄褐色土である。他の掘立柱建物同様、断面観察からは柱根痕跡を明確に捉えることはできなかった。SB3も遺物を伴っていないが、他の掘立柱建物と同じく弥生時代中期後葉の時期を想定しておきたい。



第55図 SB4

## (5) 落とし穴

平面形態が円形または楕円形で、1 m程度の垂直な掘り込みと、底面に小ピットを持つ特徴的な土坑がある。これらを落とし穴として報告する。

落とし穴は丘陵平坦部から谷部に向かう傾斜変換点に多くが分布する。最も標高の高い位置にあるのはSK18で、検出面で62.6 mを測る。逆に最も低いのは西側谷部に向かう位置に掘られたSK27で、検出面は61.0 mであった。

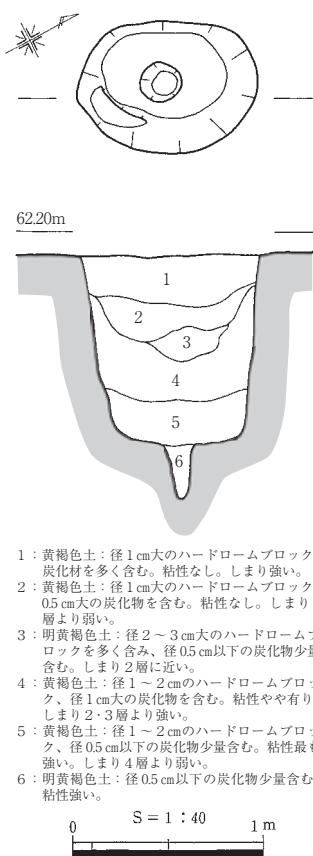
## SK8 (第56図、PL.27)

落とし穴の中で唯一東側谷部に掘られたものである。検出面の標高は62.1 mを測る。

平面形態は長径96 cm、短径70 cmの楕円形で、検出面から底面までの深さは1 mである。底面中央には最大径14 cm、最小径5 cm、深さ30 cmの小ピットが認められる。

埋土は地山を含む黄褐色土が主体である。

図化していないが、埋土4層から縄文土器と弥生土器の小片が出土している。ともに詳細な時期を特定できないが、SK8は少なくとも弥生時代にはまだ完全に埋没しきっていなかったと考えられる。



第56図 SK8

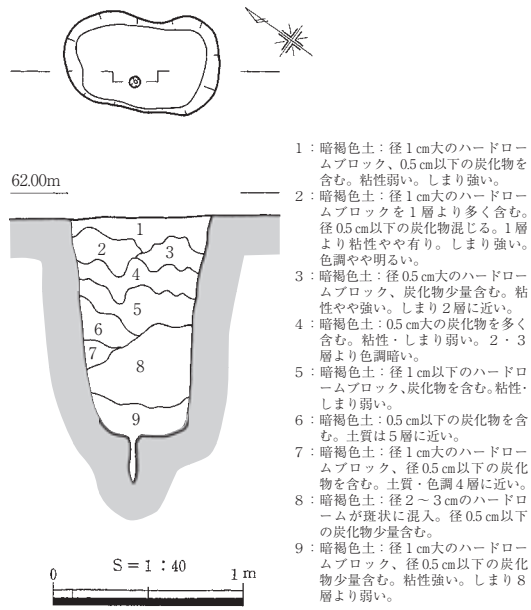
## SB4 (第55図)

調査区の北側中央付近に位置する。地形的には丘陵頂部の平坦部分にあたる。

調査区の境にあったため桁、梁方向とも1間分検出したのみで、全体の規模は不明である。柱間距離はP1 - P2間が3.9 m、P2 - P3間が3.1 mを測る。柱穴の径は30 cmから40 cmと小さいが、検出面からの深さは60 cmから80 cmある。

他の掘立柱建物と同じく、柱穴の断面観察では柱根を明確に捉えることができなかった。

遺物を伴っていないため、時期は不明であるが、SB4についても、弥生時代中期後葉の時期を想定しておきたい。



第57図 SK12

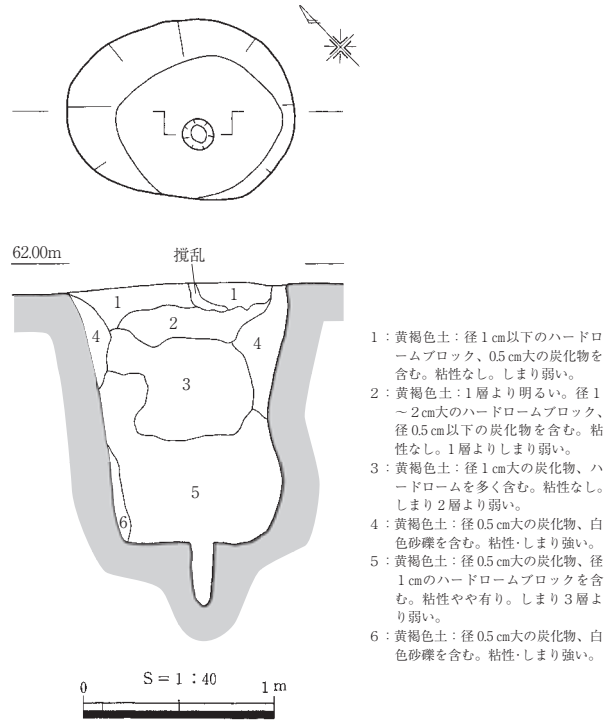
SK12（第57図、PL.27）

丘陵平坦部が北に延びていく部分の、標高62mの位置にある。

平面形態は長径83cm、短径52cmの長楕円形で、検出面から底面までの深さは1.15mである。底面中央から西にややずれた位置に径3cm、深さ26cmの小ピットが認められる。

埋土は地山を含む暗褐色土である。炭化物の多い1、4、6、7層と地山ブロックを多く含む2、3、5、8層が互層状に堆積している。

遺物は出土していない。



第58図 SK15

SK15（第58図、PL.28）

S B 2のP 4及びS B 3のP 4と重なって検出した。東側谷部を臨む、丘陵平坦面上に位置する。

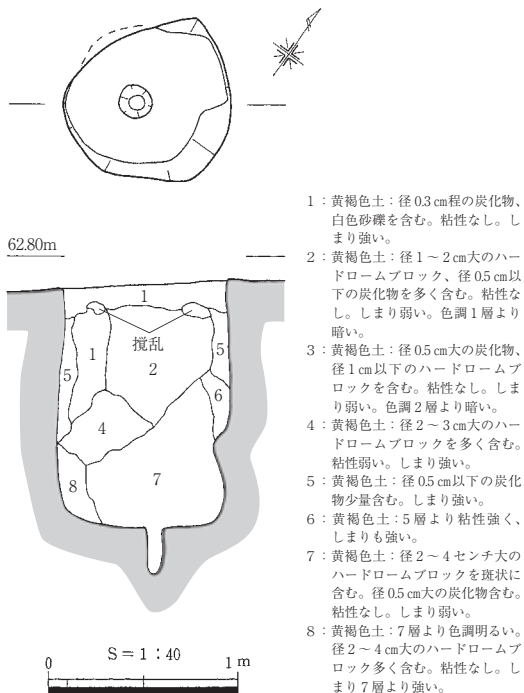
平面形態は長径1.2m、短径95cmの楕円形で、底面にかけてすばまるすり鉢状の掘り込みとなっている。検出面から底面までの深さは96cmである。底面中央に径10cm、深さ34cmの小ピットが認められる。

埋土は地山ブロックを含む黄褐色土が主体で、壁際には白色の砂礫を含む4、6層が認められた。

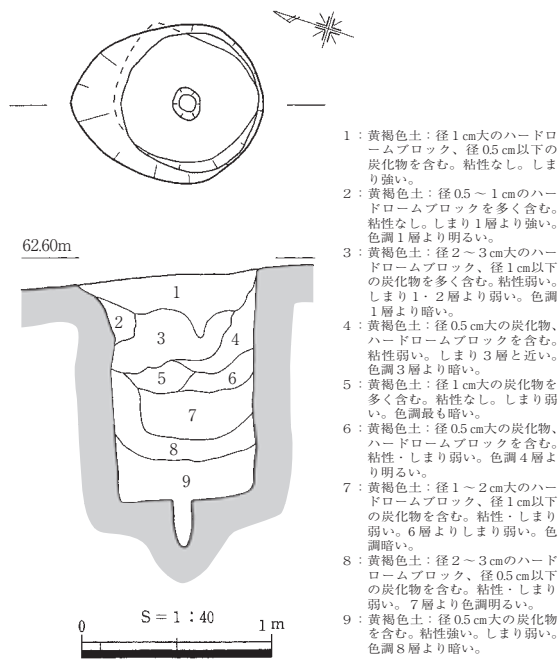
遺物は出土しておらず、時期は不明である。またS B 2、S B 3を認識する前に完掘してしまったので、弥生時代中期後葉と推定されるこれら掘立柱建物との前後関係も確認できていない。

SK18（第59図、PL.28）

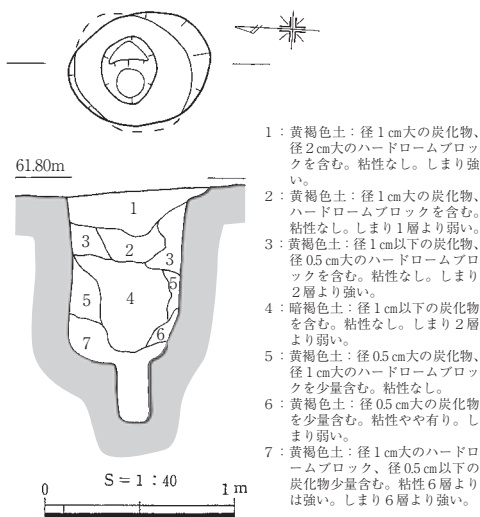
SK15の南西にある。丘陵平坦部に位置し、今回検出



第59図 SK18



第60図 SK21



第61図 SK24

なピットが認められる。底面での検出範囲は長径36cm、短径30cmを測るが、断面で確認するとピットそのものの径は18cmほどである。深さは32cmであった。

埋土は地山ブロックを含む黄褐色土が主体で、遺構の壁側から自然堆積により埋没したような堆積状況を示す。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

#### SK26 (第62図、PL.29)

S K 24の北東にあり、傾斜変換点より谷側に位置する。

平面形態は径1mの円形で、検出面から底面までの深さは1.57mである。S K 24同様、底面中央に径25cm、深さは38cmの、大きなピットが認められる。

埋土は地山ブロックを含む黄褐色土が主体である。

遺物は出土していない。

した落とし穴の中では最高位の標高62.6mで検出した。

平面形態は長径1.08m、短径90cmの不整円形で、検出面から底面までの深さは1.28mである。底面中央に径9cm、深さ24cmの小ピットが認められる。壁が崩落したものか、北東側では抉れたようになっているほか、西側は検出面から見て一部壁がオーバーハングしている。

埋土は地山ブロックを含む黄褐色土である。

遺物は出土していない。

#### SK21 (第60図、PL.28)

西側谷部を臨む、丘陵の傾斜変換点付近に位置し、S I 1、S I 3の間にある。

平面形態は長径1m、短径85cmの楕円形であるが、北側の掘り込み上部が崩落のためか広がっているため、実際の掘り込みは円形である。検出面から底面までの深さは1.22mである。底面中央に径10cm、深さ26cmの小ピットが認められる。

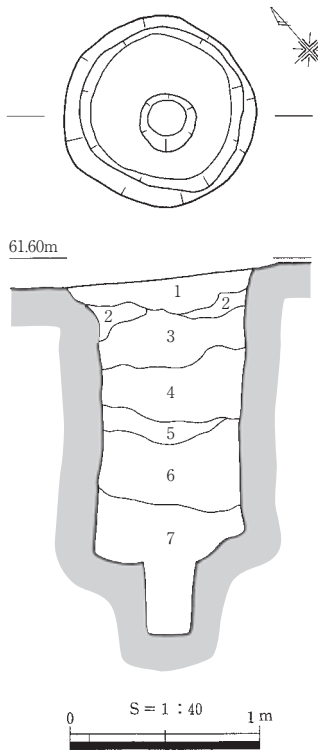
埋土は地山ブロックを含む黄褐色土が主体で、自然堆積により徐々に埋没したものと思われる。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

#### SK24 (第61図、PL.29)

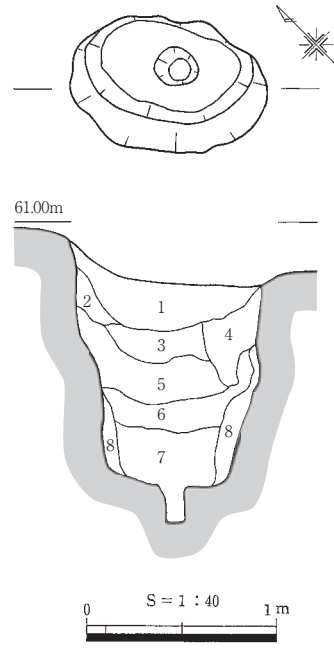
S I 1の西側、傾斜変換点というより谷に向かい傾斜が強まりだすあたりに位置する。検出面の標高は61.7mを測る。

平面形態は長径76cm、短径58cmの楕円形である。南側の掘り込み上部が広がっていたり、東西の壁がオーバーハングしており、崩落したものと思われる。検出面から底面までの深さは92cmである。底面中央に他の落とし穴よりも大きなピットが認められる。



- 1：黄褐色土：径1cm程のハードロームブロック、径0.5cm以下の焼土粒子、炭化物を含む粘性なし。しまり強い。
- 2：黄褐色土：径0.5cm以下の炭化物を含む。粘性なし。しまり弱い。1層より色調明るい。
- 3：黄褐色土：径1～2cmのハードロームブロック、径0.5cmの炭化物を多く含む。粘性なし。しまり2層より弱い。色調2層より暗い。
- 4：黄褐色土：径1～2cmのハードロームブロック、径1cm大の炭化物を含む。粘性なし。しまり3層に近い。色調3層より暗い。
- 5：黄褐色土：径0.5cm～1.0cmの炭化物を含む。4層よりしまり強い。色調は同じ。
- 6：黄褐色土：径1～2cmのハードロームブロック、炭化物を含む。粘性有り。しまり5層より弱い。
- 7：黄褐色土：径1～2cmのハードロームブロック、炭化物を含む。粘性・しまり6層より強い。

第62図 SK26



- 1：黄褐色土：径1～2cm大のハードロームブロック、径1cm以下の炭化物を多く含む。粘性なし。しまり強い。
- 2：黄褐色土：径0.5cm以下の炭化物を含む。しまり強い。色調1層より明るい。
- 3：黄褐色土：径0.5cm～1.0cmの炭化物を含む。粘性なし。しまり弱い。色調1・2層より暗い。
- 4：桃褐色土：径0.5cm以下の炭化物を含む。粘性弱く、しまり強い。壁体（ローム）の崩落土か。
- 5：黄褐色土：径1.0cm大のハードロームブロック、炭化物を多く含む。粘性なし。しまり弱い。
- 6：黄褐色土：5層より色調暗い。径1cm大の炭化物を含む。粘性なし。しまり弱い。
- 7：黄褐色土：径1cm大のハードロームブロック、炭化物を含む。粘性なし。しまり弱い。色調6層より明るい。
- 8：黄褐色土：径0.5cm以下の炭化物を含む。粘性強い。しまりも強い。壁体崩落土である。

第63図 SK27

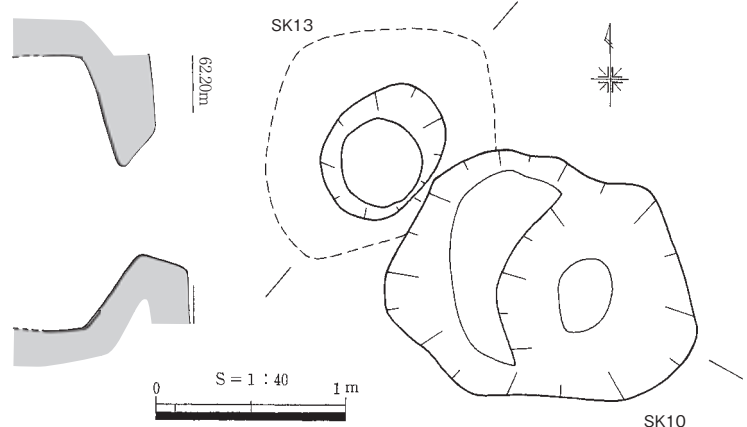
SK27（第63図、PL.29）

S S 1 の西側、谷に向かいすでに傾斜が強まっているところに位置する。検出面の標高は落とし穴の中では最も低く61.0mを測る。

平面形態は長径1.04m、短径70cmの長楕円形である。検出面より底面が狭いすり鉢状の掘り込みとなり、深さは1.28mを測る。壁面は崩落したものと思われ、でこぼことしている。底面中央に径10cm、深さは18cmの小ピットがある。

埋土は地山ブロックを含む黄褐色土が主体で、壁の崩落を示すと思われる4、8層が観察できた。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。



- 1：黄褐色土：径0.2～0.5cm大の炭化物、白色粒子、焼土粒子を含む。粘性なし。しまり弱い。
- 2：黄褐色土：径0.2cm大の炭化物、径1cm以下のハードロームブロック少量含む。粘性なし。しまり弱い。
- 3：黄褐色土：径0.2cm以下の白色粒子含む。粘性なし。しまり最も強い。
- 4：黄褐色土：径1～2cmのハードロームブロック、径0.5cm以下の炭化物、白色粒子を含む。粘性弱い。しまり強い。
- 5：黄褐色土：径3cm大のハードロームブロックを含む。径0.2cm大の炭化物を含む。色調最も明るい。
- 6：暗褐色土：径0.5～1.0cmの炭化物含む。粘性やや有り。しまり弱い。
- 7：黄褐色土：径0.5cm大のハードロームブロックを含む。粘性強い。しまり強い。
- 8：黒褐色土：径1cmの炭化物、ハードロームブロックを含む。粘性・しまり強い。
- 9：黄褐色土：径2cm以下のハードロームブロックを多く含む。径0.5cm大の白色砂礫を含む。粘性なし。しまり強い。
- 10：黄褐色土：径0.5cm以下の炭化物、焼土粒子を含む。粘性・しまり強い。
- 11：黄褐色土：径0.5cm以下の炭化物、ハードロームブロック、白色砂礫を含む。粘性・しまり強い。
- 12：黄褐色土：径1cm以下の炭化物を多く含む。粘性なし。しまり強い。
- 13：黄褐色土：径2～3cmのハードロームブロック、径0.5cm以下の炭化物を含む。粘性・しまり強い。

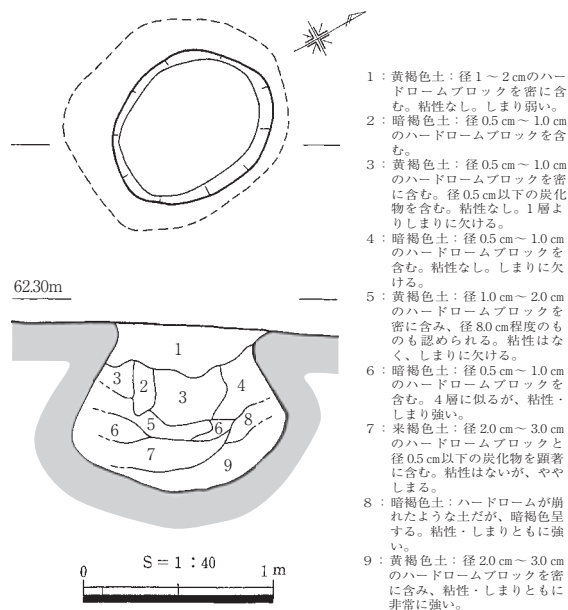
第64図 SK10・13

(6) 貯蔵穴

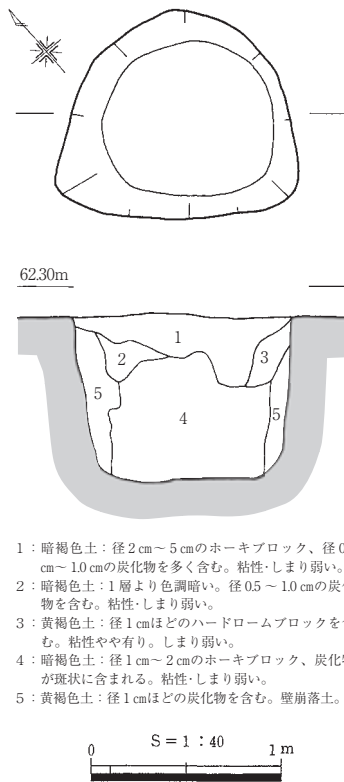
掘り込みの下半が検出面より広いものを貯蔵穴として報告する。

SK13（第64図、PL.30）

S B 1 の北に近接する。東側の一部をS K 10に切られている。検出面の長径74cm、短径56cmを測る。検出面から34cm下がったところで内側にくびれ、フラスコ状の掘り込みとなるが、埋土と地山の区別がつかず掘り過ぎてしまい、全体の規模を確認できなかった。確認できた範囲では長径1.44



第65図 SK11



第66図 SK1

m、短径1.14mであった。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

### SK11 (第65図、PL.30)

S K 13の東に近接する。

検出面の長径92cm、短径76cmを測る。検出面から10cm下がったところで内側にくびれ、フラスコ状の掘り込みとなる。検出面から底面までの深さは88cmであるが、最大径は底面より少し上位で、長径1.2m、短径1.05mを測る。

埋土は地山ブロックを含む黄褐色土が主体である。地山ブロックが密な土も見られ、周囲から流れ込んだ土だけでなく、壁の崩落も加わり埋没したような堆積状況を示す。

S K 11も遺物を伴っていないため、所属時期を特定できない。

### (7) その他の土坑

落とし穴、貯蔵穴以外のものを一括する。

#### SK1 (第66図、表28、PL.30・46)

S I 2の東側、調査区南壁に接して検出された。

平面形態は長径1.3m、短径1.2mの不整円形で、深さは88cmを測る。

埋土は壁の崩落土と考えられる5層を除き、基本的に炭化物を含む暗褐色土で構成される。埋土の多くを占める4層のあり方から、自然堆積により徐々に埋没したというよりは、一度に埋められた可能性がある。

図化できなかったが、埋土中から土器片が出土している。S K 1の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

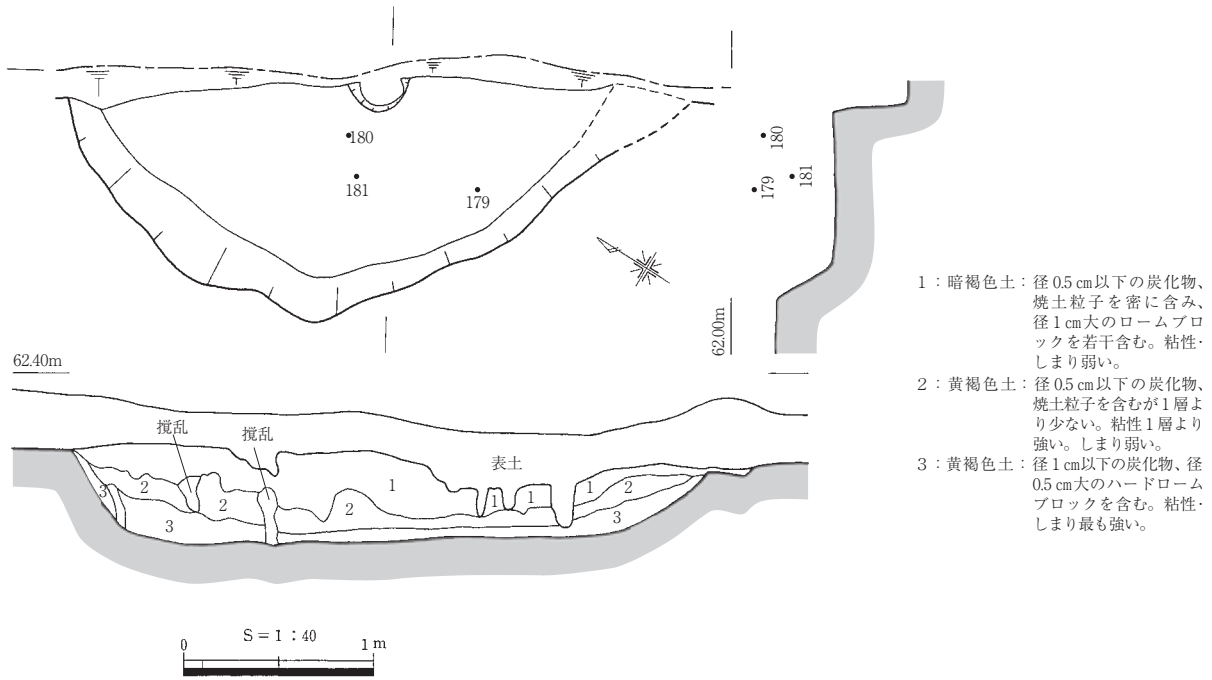
#### SK3 (第67・68図、表23、PL.31・40)

東側谷部を臨む丘陵上の傾斜変換点に位置する。

調査区外に広がるため、全体の形状や規模は不明であるが、南北1.8m、東西2.3mの範囲で、隅丸方形の掘り込みを検出している。深さは最大で50cmである。調査区境で深さ40cm、径は30cm程度と考えられるピットを1基確認した。

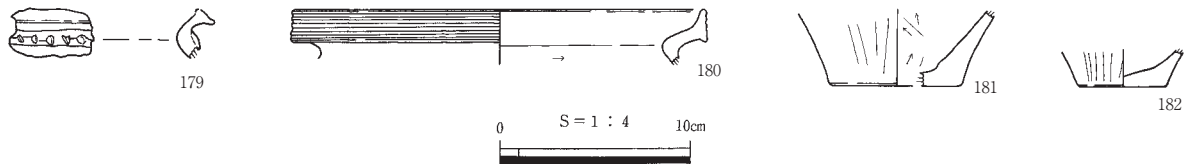
埋土は3枚に分けられ、地山ブロックのほか、炭化物や焼土粒が目立つ。

2層上面を中心に土器が出土した。180は口縁端部を上下に拡張し、外面に凹線文を施す。風化により明確ではないが、内面頸部以下はヘラケズリにより調整されていると判断した。床面出土ではないので、この遺構の時期を直接示すというには根拠が弱い。S K 3は弥生時代後期初頭に下る可能性も考えておきたい。S K 3は堅穴住居である可能性もあるが、壁溝や柱穴の存在など積極的な根拠にかけるため、土坑として報告しておく。



- 1：暗褐色土：径0.5cm以下の炭化物、焼土粒子を密に含み、径1cm大のロームブロックを若干含む。粘性・しまり弱い。
- 2：黄褐色土：径0.5cm以下の炭化物、焼土粒子を含むが1層より少ない。粘性1層より強い。しまり弱い。
- 3：黄褐色土：径1cm以下の炭化物、径0.5cm大のハードロームブロックを含む。粘性・しまり最も強い。

第67図 SK3



第68図 SK3出土遺物

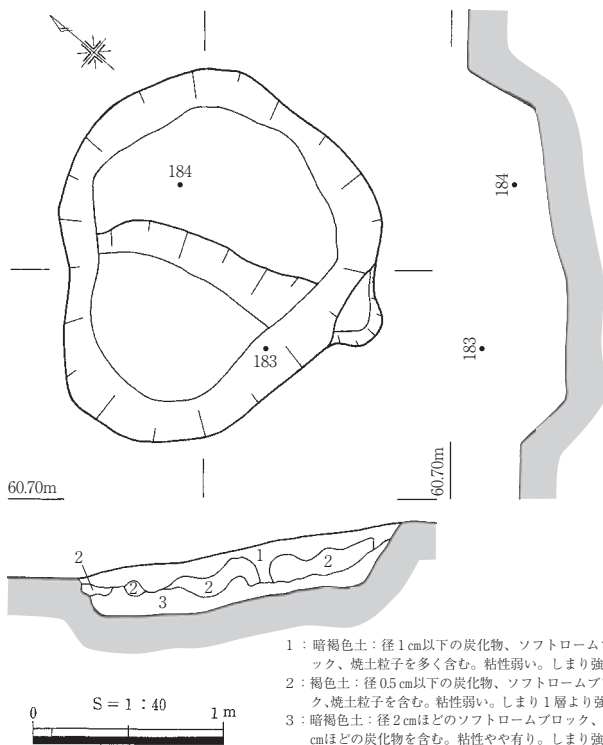
SK4（第69・70・88図、表23・29、PL.31・50）

SI 4の南西に近接する土坑である。西側谷部の傾斜途中に掘り込まれている。

長径1.92m、短径1.66mの不整円形で、底面は二段掘りとなっている。深さは最大で34cmを測る。

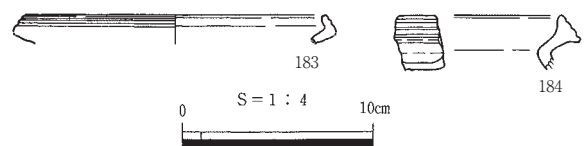
埋土は地山ブロックや炭化物、焼土を含む。傾斜に沿って堆積しており、自然に埋没したものと思われる。

埋土中から出土した土器から、弥生時代中期後葉と考えられる。

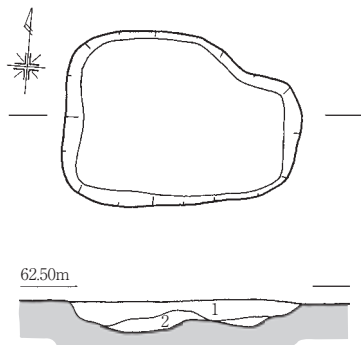


- 1：暗褐色土：径1cm以下の炭化物、ソフトロームブロック、焼土粒子を多く含む。粘性弱い。しまり強い。
- 2：褐色土：径0.5cm以下の炭化物、ソフトロームブロック、焼土粒子を含む。粘性弱い。しまり1層より強い。
- 3：暗褐色土：径2cmほどのソフトロームブロック、径1cmほどの炭化物を含む。粘性やや有り。しまり強い。

第69図 SK4

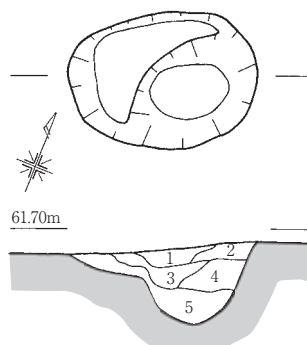


第70図 SK4出土遺物



- 1: 褐色土: 径1cm大のハードロームブロック、径0.5cm以下の炭化物を含む。粘性・しまり弱い。
- 2: 黄褐色土: 径1cm大のハードロームブロック、径0.3cmほどの炭化物を若干含む。粘性弱い。しまり1層より強い。

第71図 SK7



- 1: 黄褐色土: 径0.5cm以下の炭化物、径1cm大のハードロームブロックを含む。粘性なし。しまり強い。
- 2: 黄褐色土: 径0.3mm以下の炭化物少量含む。粘性なし。しまり弱い。
- 3: 黄褐色土: 径2~3cm大のハードロームブロックを密に含む。径0.3cmの炭化物を少量含む。粘性なし。しまり強い。
- 4: 黄褐色土: 径0.5cm以下の炭化物を含む。径1cm大のハードロームブロックを含む。粘性やや有り。しまり強い。
- 5: 黄褐色土: 径0.5cm以下の炭化物を含む。粘性・しまり強い。

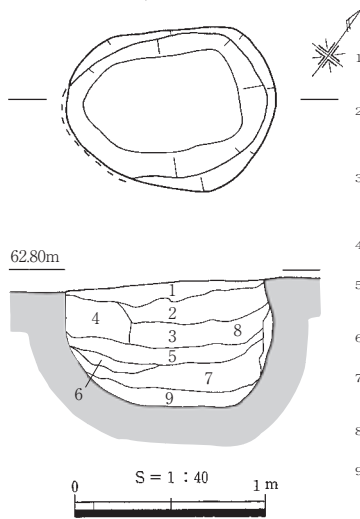
第72図 SK14

いとこで40cmの深さが認められた。埋土は下層は細かく分層できたが、基本的に地山ブロックと炭化物などが混じる層である。土器は伴っておらず、埋土中から黒曜石の剥片が出土したのみである。時期は不明である。

### SK14 (第72図、PL.32)

S K 26の東に隣接する。傾斜変換点より谷側に掘られている。

長径1m、短径74cmの楕円形を呈する土坑で、西側に平坦面をもつ二段掘りとなっている。検出面から西側平坦面までは10cm、最も深いところで45cmの深さであった。



- 1: 黄褐色土: 径1cm大のハードロームブロック、径0.5cm以下の炭化物を含む。粘性・しまり弱い。
- 2: 黄褐色土: 径1cm大のハードロームブロック、径0.5cm以下の炭化物を含む。粘性・しまり弱い。1層よりも色調明るい。
- 3: 黄褐色土: 径1~2cm大のハードロームブロックを含む。径0.5cm以下の炭化物を含む。粘性なし。しまり2層より弱い。
- 4: 黄褐色土: 径0.5cm以下の炭化物、白色砂礫を含む。しまり強い。
- 5: 黄褐色土: 径0.5cm以下の炭化物、径1cm大のハードロームブロックを含む。粘性・しまり弱い。
- 6: 黄褐色土: 径0.5cm以下の炭化物、白色砂礫を含む。しまり強い。
- 7: 黄褐色土: 径1~2cm大のハードロームブロック、径0.5cm以下の炭化物を含む。粘性・しまり弱い。
- 8: 黄褐色土: 径0.5cm大の炭化物、白色砂礫を含む。粘性・しまり強い。
- 9: 黄褐色土: 径0.5cm大の炭化物、径1~2cmのハードロームブロックを多く含む。粘性・しまり強い。

第73図 SK19

埋土は地山ブロックや炭化物などを含む土で構成され、周囲から流入した土で自然に埋没したものと考えられる。遺物は伴っていない。

### SK19 (第73図、PL.32)

丘陵頂部の平坦面に立地し、S K 18の西に隣接している。

長径1.12m、短径86cmの楕円形で、底面までは66cmを測る。壁はほぼまっすぐに立ち上がる。

埋土は粘性や含有物の状況から細分したが、基本的には地山ブロックなどを含む黄褐色土である。自然堆積によって埋没したものと思われる。遺物は出土して

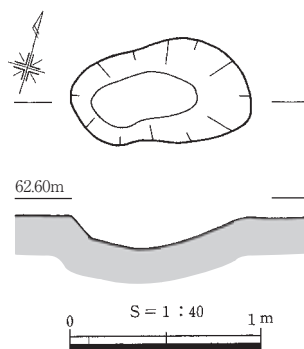
いない。

### SK20 (第74図、PL.32)

S B 1の南に位置する。長径94cm、短径74cmの長楕円形である。壁の立ち上がりはしっかりしたものではない。検出面から底面までの深さは最大で15cmである。

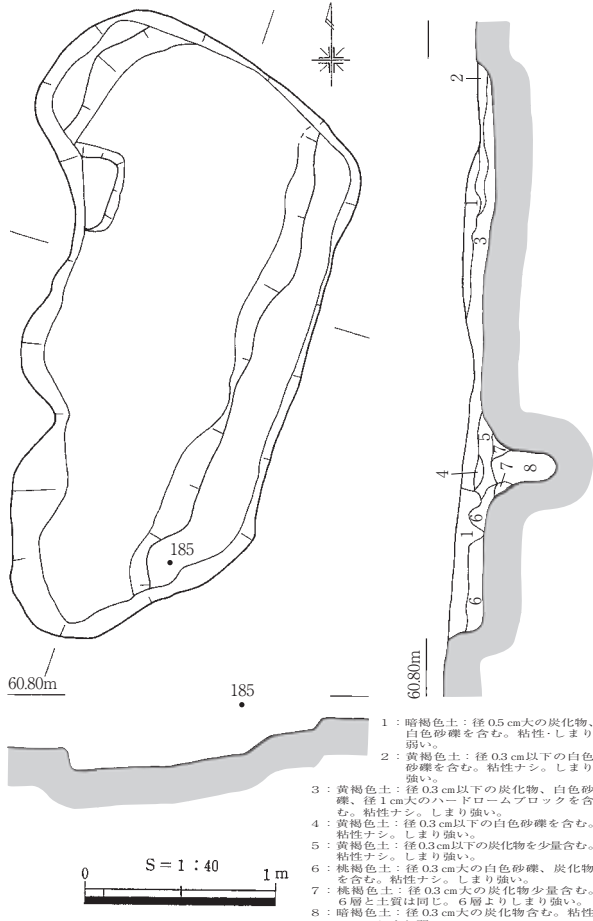
埋土は少量の炭化物と地山ブロックを含む黄褐色土であった。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第74図 SK20





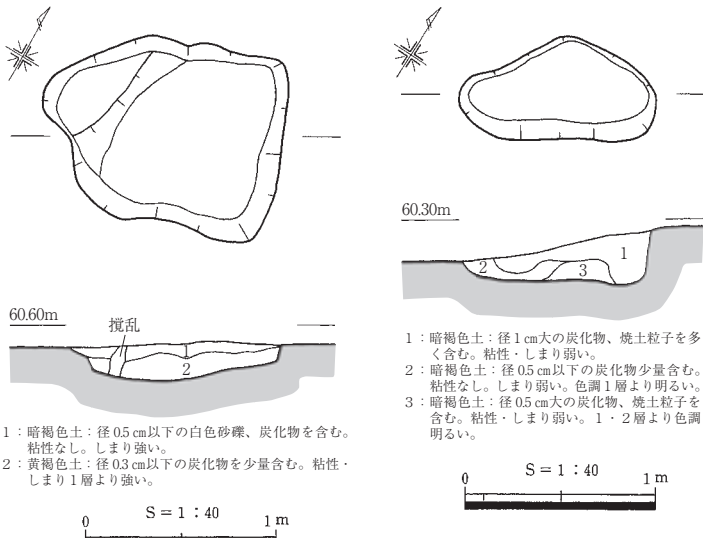
- 1：暗褐色土：径0.5cm大の炭化物、白色砂礫を含む。粘性・しまり弱い。
- 2：黄褐色土：径0.3cm以下の白色砂礫を含む。粘性ナシ。しまり強い。
- 3：黄褐色土：径0.3cm以下の炭化物、白色砂礫、径1cm大のハードロームブロックを含む。粘性ナシ。しまり強い。
- 4：黄褐色土：径0.3cm以下の白色砂礫を含む。粘性ナシ。しまり強い。
- 5：黄褐色土：径0.3cm以下の炭化物を少量含む。粘性ナシ。しまり強い。
- 6：桃褐色土：径0.3cm大の白色砂礫、炭化物を含む。粘性ナシ。しまり強い。
- 7：桃褐色土：径0.3cm大の炭化物少量含む。6層と土質は同じ。6層よりしまり強い。
- 8：暗褐色土：径0.3cm大の炭化物含む。粘性ナシ。しまり弱い。

第75図 SK22



第76図 SK22出土遺物

埋土は炭化物を含む暗褐色土と黄褐色土で、地山ブロックは顕著に含まない。遺物は出土していないため、時期は不明である。



- 1：暗褐色土：径0.5cm以下の白色砂礫、炭化物を含む。粘性なし。しまり強い。
- 2：黄褐色土：径0.3cm以下の炭化物を少量含む。粘性・しまり1層より強い。

- 1：暗褐色土：径1cm大の炭化物、焼土粒子を多く含む。粘性・しまり弱い。
- 2：暗褐色土：径0.5cm以下の炭化物少量含む。粘性なし。しまり弱い。色調1層より明るい。
- 3：暗褐色土：径0.5cm大の炭化物、焼土粒子を含む。粘性・しまり弱い。1・2層より色調明るい。

第77図 SK23

第78図 SK25

SK22（第75・76図、表23、PL.32・40）

西側谷部の傾斜地に掘られた土坑であり、南にS I 4が位置する。検出面は傾斜地ということもあり東側が標高60.7m、西側が60.5mと、20cmの差がある。

長径3.2m、短径1.8mの不整形土坑で、そう顕著ではないものの、東側と一部西側が二段掘りの形となる。深さは掘り方の規模から見れば浅く、最大で20cmほどである。

埋土は地山ブロックや炭化物などが混じるもので、傾斜に沿って自然堆積したものと思われる。

埋土中から出土した甕の口縁部185を図化した。主として上方へ拡張された口縁端部の外面に凹線文が施されている。内面頸部以下の調整は判然としないが、ヘラケズリは認められない。

この土器から、SK22は弥生時代中期後葉に位置づけておく。

SK23（第77図、PL.32）

SK22の南西に近接する土坑である。長径1.3m、短径1.1mの不整形なもので、西側に平坦面をもつ二段掘りとなっている。深さは20cmである。

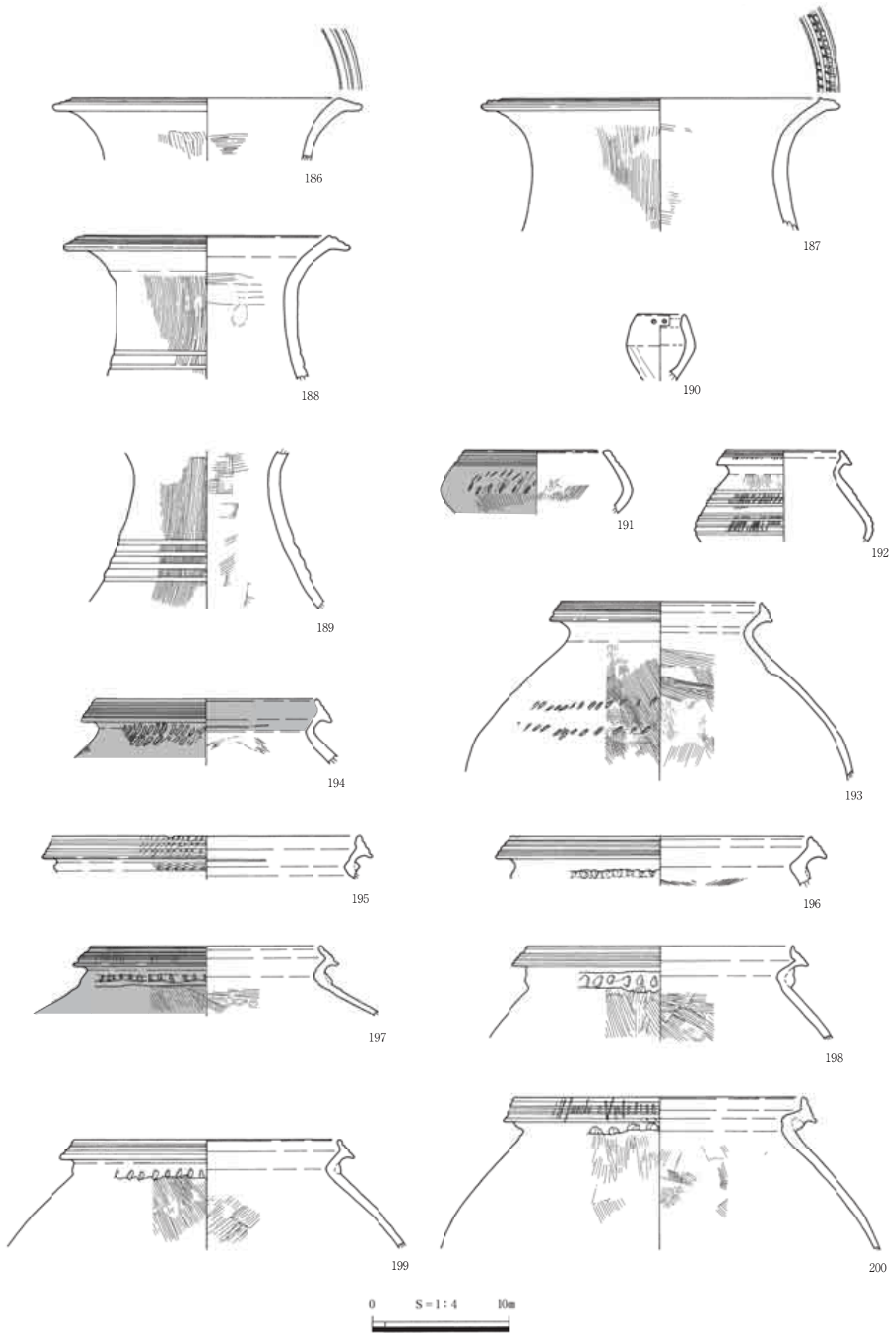
SK25（第78図、PL.32）

SK23の南西に位置する。西側谷部の傾斜地に掘られた土坑である。

長径1m、短径54cmの不整楕円形で、谷に向かう西側の残りが悪い。深さは最大で30cmを測る。

埋土は炭化物や焼土粒を含む暗褐色土で、とくに1層には多く含まれている。

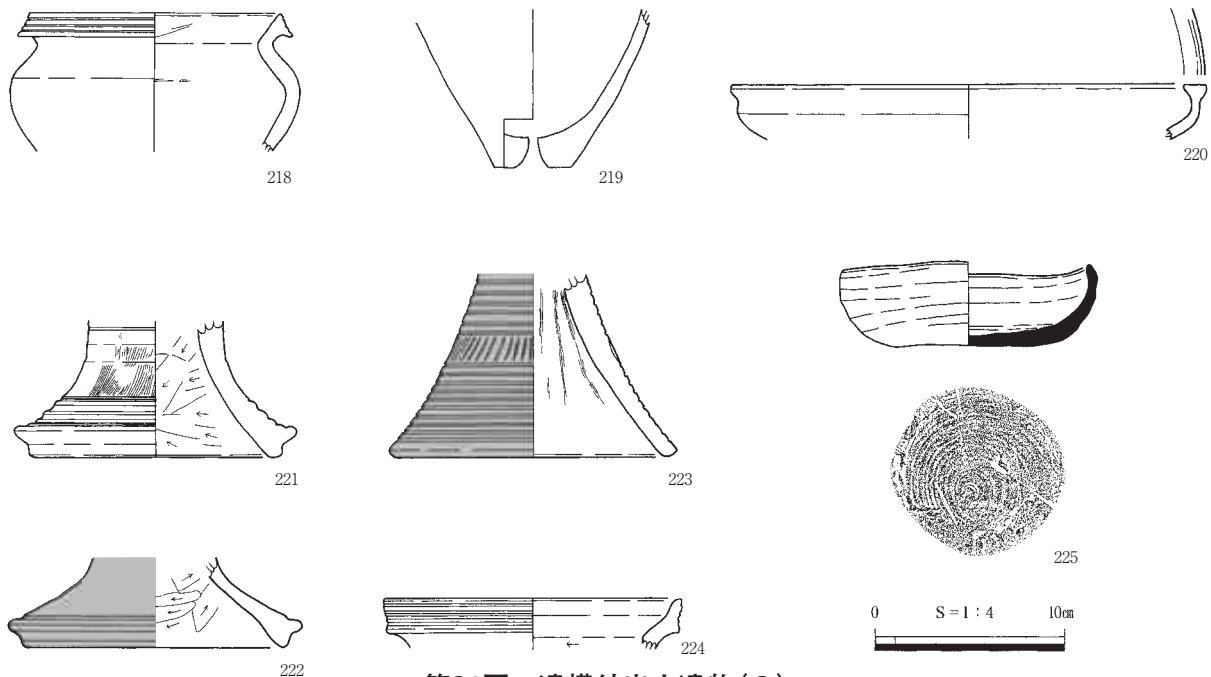
遺物は伴っておらず、時期は不明である。



第79図 遺構外出土遺物(1)



第80図 遺構外出土遺物(2)



第81図 遺構外出土遺物(3)

**(8) 遺構外出土遺物 (第79～85・87・88図、表24・26・27、PL.41～50)**

第79図から第81図に土器を掲げた。186から187は広口壺。190と191は無頸壺である。192は体部外面に直線文や刺突文を施す。算盤玉状の体部を持つものと思われる。193は体部最大径の位置が低いと考えられるので、壺としておく。

194から第80図217は甕とした。194から200は頸部に指頭圧痕文突帯を巡らすもので、口縁部外面にキザミを有するものもある。201から217は、そうした装飾のない甕を一括している。

第81図218は、形態から鉢と考えられる。219は体部下半より上を欠失している。底部には焼成後に穿孔が施されている。220は高坏の坏部。拡張された口縁端部には凹線文が認められる。221から223は脚部である。脚台付き壺か高坏の一部と考えられる。

以上は、弥生時代中期後葉 (IV-2 から IV-3) に位置づけられる。

224は上方へ拡張した口縁部外面に4条の直線文が施される。内面頸部以下ヘラケズリで、弥生時代後期中葉 (V-2) のものである。

225は須恵器坏身。この資料は3区ではなく、2区出土のものである。休憩テントを建てるために表土を削った際出土した。底部回転糸切りで、8世紀後半のものと考えられる。

第82図から第85図は石器である。第82図 S 38から第84図 S 51は敲石。棒状の礫を用いるもの (第82・83図) と円礫または垂円礫を用いるもの (第84図) がある。小口面のみでなく、側面など複数部位を使用するものが多い。

S 52は扁平な礫の一面に敲打痕が認められる。形態的に台石と思われる。

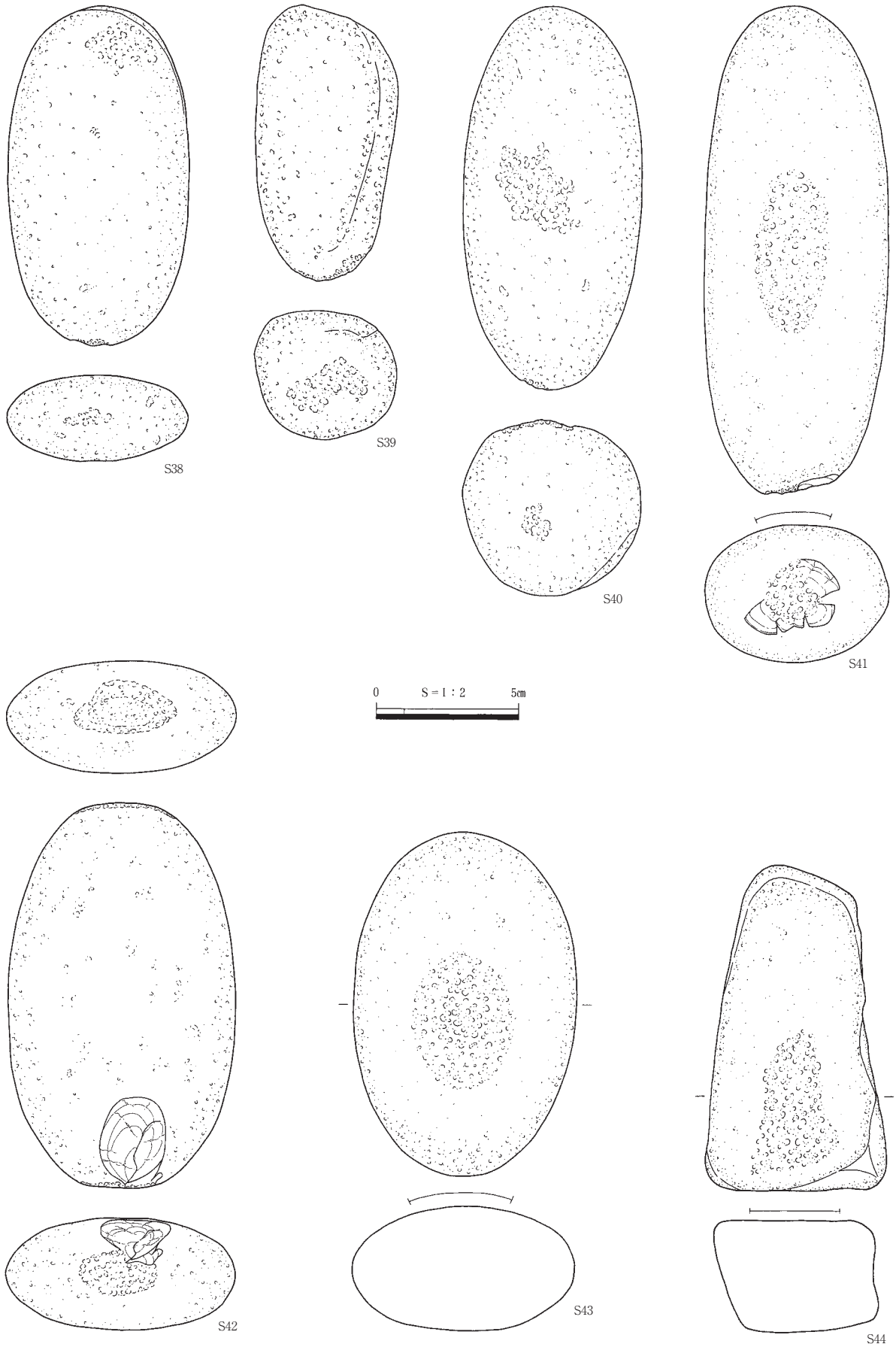
第85図 S 53は小口面に敲打痕、器体中央に擦痕が認められる。敲石と磨石の機能を併せ持つものである。S 54は小口面を使用した磨石。S 55は大型石庖丁の破片である。板状に割れた石材の一端を刃部としている。S 56から S 61は砥石。S 62は砲弾状に整形した礫の長軸に沿って溝を設けた石錘である。器体に残る痕跡から、敲打により整形し、研磨仕上げをしたことが分かる。

表23 土坑内出土土器観察表

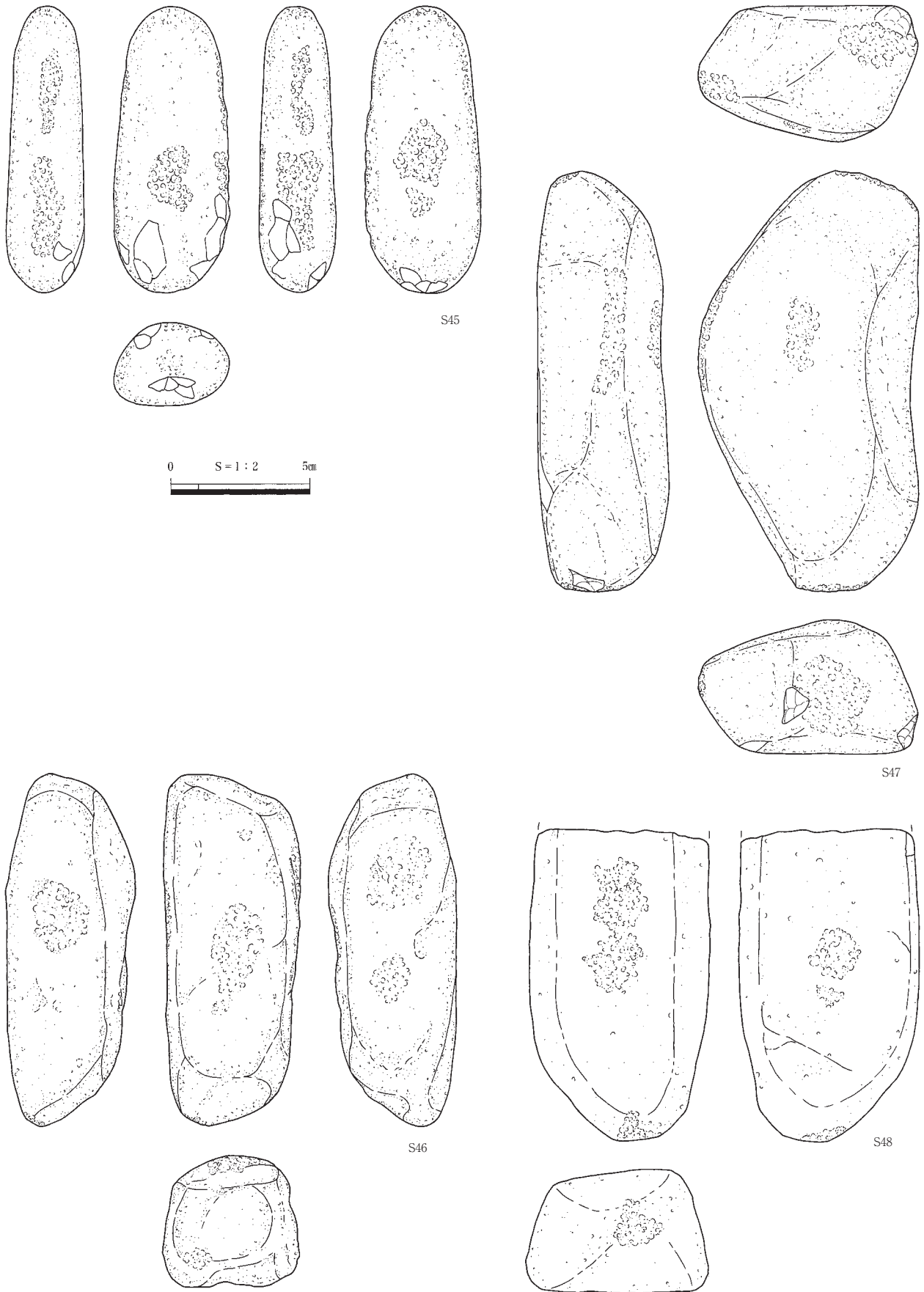
遺物No.	遺構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No.
179	SK3 埋土	弥生土器 甕	一 △5	口縁-頸部 破片	外面：口縁部3条平行沈線文、頸部ナデ 内面：口縁-頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		56
180	SK3 埋土	弥生土器 甕	※21.8 △2.8	口縁-頸部 破片	外面：口縁部4条平行沈線文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	径1.5mm以下の白・黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		162
181	SK3 埋土	弥生土器 甕・壺?	底径※8.1 △3.9	底部 破片	外面：底部ミガキ、底部ナデ 内面：底部ケズリ、底部ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		160
182	SK3 埋土	弥生土器 甕・壺?	底径※4.6 △1.9	底部 破片	外面：底部ミガキ、底部ナデ 内面：底部調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄灰色 内面：黒褐色~灰褐色	良好		56
183	SK4 埋土	弥生土器 甕	※15.7 △1.5	口縁部 破片	外面：口縁部2条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		66
184	SK4 埋土	弥生土器 甕	一 △2.3	口縁-頸部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ	径1mm以下の黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		77
185	SK22 埋土	弥生土器 甕	※19.2 △2.8	口縁-頸部 破片	外面：口縁部5条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ?	径2mm以下の白色砂粒	外面：灰黄色 内面：にぶい黄褐色	良好		1433

表24 遺構外出土土器観察表

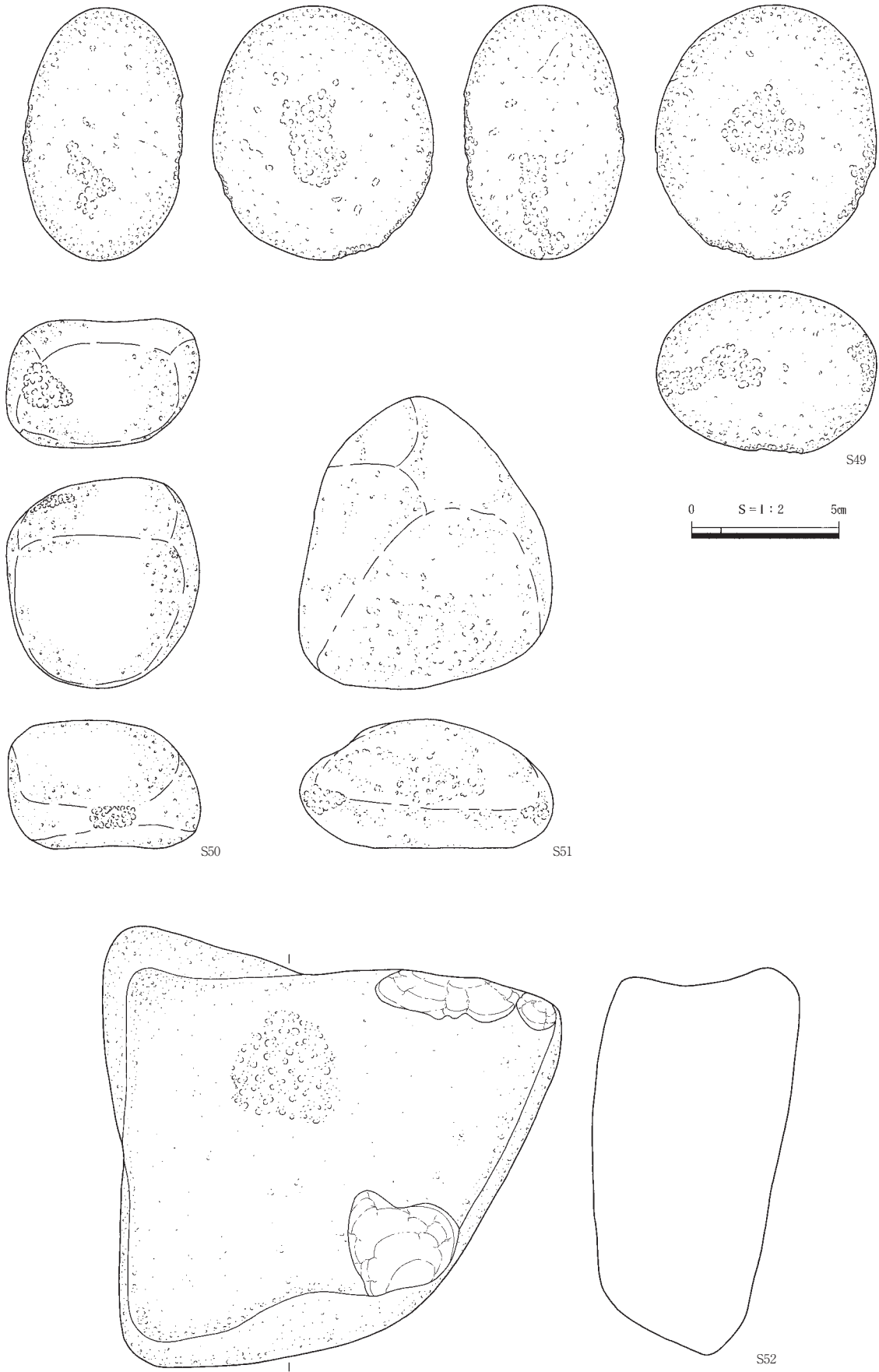
遺物No.	遺構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No.
186	F25 黄褐色土	弥生土器 壺	※19.6 △4.3	口縁-頸部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ・ハケ 内面：口縁部ナデ、頸部ナデ・ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄色 内面：浅黄褐色	良好		182
187	G25 黄褐色土	弥生土器 壺	※23.3 △9.4	口縁-頸部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ハケ・ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケ・ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい橙色 内面：橙色	良好		1919・1932・1934
188	G25 黄褐色土	弥生土器 壺	※18.2 △10.3	口縁部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ・ハケ・2条凹線文 内面：口縁部ナデ、頸部ハケ・ナデ・指オサエ	径1mm以下の白・灰色砂粒・雲母片	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		1357・1590
189	G25 黄褐色土	弥生土器 壺	一 △11.3	頸部 1/6	外面：頸部4条凹線文・ハケ 内面：頸部ハケ・ナデ	径1mm以下の白色砂粒・雲母片	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1309
190	G25 黄褐色土	弥生土器 無頸壺	※8.5 △4.7	口縁-体部 1/3	外面：口縁部2単位焼成前穿孔、ナデ、体部ミガキ 内面：頸部ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1703
191	G25 黄褐色土	弥生土器 無頸壺	※10.6 △4.5	口縁-体部 1/3	外面：口縁部3条凹線文、体部刺突文・ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：褐灰色 内面：にぶい赤褐色	良好	外面赤色塗彩	957
192	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※8.4 △6.6	口縁-体部 1/4	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ・3~4条凹線文 内面：口縁部ナデ、体部風化により調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：オリーブ黒~浅黄褐色	良好		1196・1251
193	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※14.8 △12.8	口縁-体部 1/4	外面：口縁部4条凹線文、頸部ナデ、体部刺突文・ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒・雲母片	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		1130
194	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※16.4 △4.7	口縁-体部 破片	外面：口縁部4条凹線文、頸部刺突、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：赤褐色 内面：赤褐色	良好	内外面赤色塗彩	1579
195	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※22.2 △3.2	口縁-頸部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯 内面：口縁-頸部ナデ、体部調整不明	径1mm以下の白・黒・赤色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1046
196	E26 黄褐色土	弥生土器 甕	※21.8 △3.5	口縁-頸部 破片	外面：口縁部4条凹線文、頸部貼付突帯 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		283
197	F26 黄褐色土	弥生土器 甕	※17.0 △4.0	口縁-体部 1/6	外面：口縁部4条凹線文、頸部貼付突帯、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径2mm以下の白・黒色砂粒	外面：明黄褐色 内面：赤褐色	良好	外面赤色塗彩	292
198	G26 黄褐色土	弥生土器 甕	※18.4 △7.0	口縁-体部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒・雲母片	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		193
199	G26 黄褐色土	弥生土器 甕	※19.6 △7.9	口縁-体部 1/6	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		91
200	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※21.2 △10.9	口縁-体部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1.5mm以下の白色砂粒・雲母片	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1568・1649・1767
201	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※17.0 △5.4	口縁-体部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1302
202	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※16.0 △5.7	口縁-体部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1503
203	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※18.0 △5.7	口縁-体部 破片	外面：口縁部4条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1741
204	G24 黄褐色土	弥生土器 甕	※13.6 △10.9	口縁-体部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色~灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1744
205	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※16.4 △5.8	口縁-体部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒・赤色砂粒	外面：明黄褐色 内面：橙色	良好		1517
206	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※18.8 △7.6	口縁-体部 1/6	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色~橙色	良好		1292
207	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※14.2 △7.7	口縁-体部 1/6	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径2.5mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色~黒褐色	良好		1290
208	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※15.3 △6.5	口縁-体部 1/6	外面：口縁部4条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒・雲母片	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	良好		212
209	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※21.0 △7.1	口縁-体部 1/6	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒・雲母片	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		1344
210	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※13.0 △14.5	口縁-体部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1.5mm以下の白・黒色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色~にぶい褐色	良好		1962
211	F26 黄褐色土	弥生土器 甕	※13.6 △9.3	口縁-体部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		293
212	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※14.0 △10.4	口縁-体部 1/6	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒・雲母片	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色~灰黄褐色	良好		1072
213	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※17.4 △7.8	口縁-体部 1/6	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1758
214	E25 黄褐色土	弥生土器 甕	※14.6 △13.5	口縁-体部 1/4	外面：口縁部4条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		662
215	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※18.0 △13.9	口縁-体部 1/4	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒・雲母片	外面：暗黄褐色 内面：灰黄褐色~暗黄褐色	良好		1401
216	F26 黄褐色土	弥生土器 甕	※15.6 △15.7	口縁-体部 1/3	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部上ハケ、体部下ケズリ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		293
217	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※19.0 △11.4	口縁-体部 1/6	外面：口縁部4条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：浅黄褐色~黄灰色 内面：浅黄褐色	良好		1584
218	E25 黄褐色土	弥生土器 甕	※13.2 △7.2	口縁-体部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁-頸部、体部ハケ	径2mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		907
219	G26 黄褐色土	弥生土器 甕・壺?	底径※4.0 △8.3	底部 破片	外面：底部調整不明、底面焼成後穿孔 内面：底部ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：明赤褐色	良好		330
220	G25 黄褐色土	弥生土器 甕	※25.2 △2.8	口縁-体部 破片	外面：口縁部3条凹線文、体部風化により調整不明 内面：口縁-体部風化により調整不明	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1556・1562・1917
221	G26・27 黄褐色土	弥生土器 高坏	底径※12.8 △7.2	脚部 破片	外面：脚部ハケ・5条凹線文、裾部1条凹線文 内面：脚部ケズリ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：浅黄色 内面：黒褐色	良好		46・196
222	G25 黄褐色土	弥生土器 高坏	底径※13.8 △4.6	脚部 破片	外面：脚部ナデ・1条凹線文、裾部1条凹線文 内面：脚部ケズリ、裾部ナデ	径2mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：明褐色	良好	外面赤色塗彩	1957
223	G25 黄褐色土	弥生土器 高坏	底径※15.0 △9.6	脚部 破片	外面：脚部16条凹線文 内面：脚部しぼり痕・ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：明赤褐色	良好	外面赤色塗彩	1333・1561・1626・1700
224	不明 黄褐色土	弥生土器	※15.8 △2.6	口縁-頸部 破片	外面：口縁部4条平行沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	径1mm以下の白・黒・赤色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	外面スス付着	4
225	2区 黄褐色土	須恵器 坏身	131 4.4	口縁-底部 完形	外面：口縁-底部回転ナデ、底面回転糸切痕 内面：口縁-底面回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄灰色~暗黄褐色 内面：暗黄褐色	堅緻	回転糸切痕	18



第82図 遺構外出土遺物(4)



第83図 遺構外出土遺物(5)

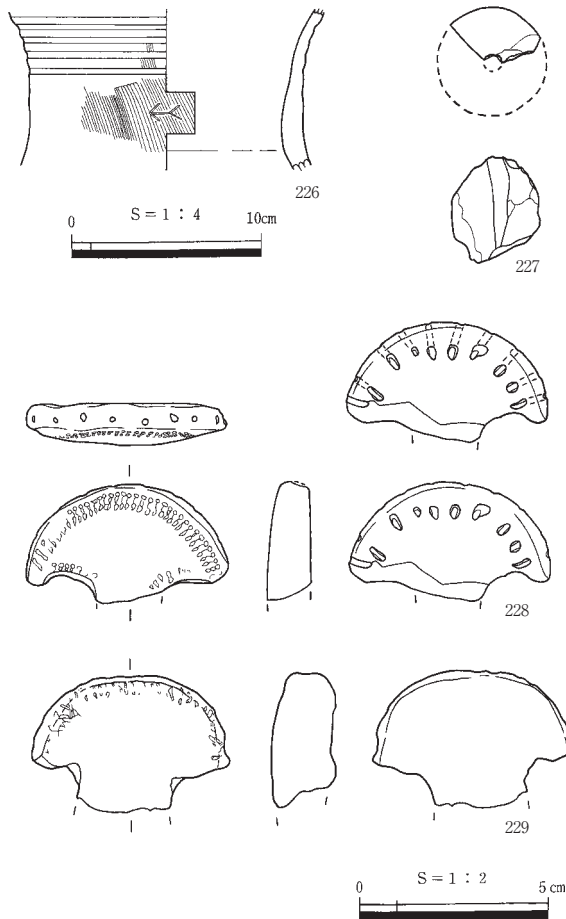


第84図 遺構外出土遺物(6)





第85図 遺構外出土遺物(7)



第86図 絵画土器・土製品

表25 絵画土器・土製品観察表

遺物No.	挿図・PL	遺構・地区・層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取上No.	備考
228	第86図 P L. 4 5	S I 4	分銅形土製品	3.15	5.3	1.1	16.6	739	
229	第86図 P L. 4 5	S I 1	分銅形土製品	3.5	5.1	1.7	30.2	501	

遺物No.	遺構・層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No.
226	遺構外 黄褐色土	弥生土器 壺	— 器高8.4	頸部	外面：凹線、ハケメ 内面：ナデ		外面：浅黄色 内面：浅黄色	良好		1241

遺物No.	遺構	層位	形態	高さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No.
227	G25グリッド	埋土中	管状	△2.7	※2.85	※0.5	6.7	ナデ	径1mm以下の白色砂粒	オリーブ黒色	良好	片面穿孔	1751

表26 遺構外出土石器観察表(1)

No.	挿図・PL	遺構・地区 層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取上No.	備考
S38	第82図 PL.48	G25グリッド 黄褐色土	敲石	安山岩	11.8	6.4	3.0	340.0	1595	
S39	第82図 PL.48	G25グリッド 黄褐色土	敲石	安山岩	9.5	5.0	4.5	330.0	1348	
S40	第82図 PL.48	不明 黒色土	敲石	安山岩	13.3	6.3	6.15	680.0	6	
S41	第82図 PL.48	E28グリッド 黄褐色土	敲石	安山岩	16.9	6.5	4.8	800.0	309	
S42	第82図 PL.48	G25グリッド 黄褐色土	敲石	安山岩	12.5	8.1	4.0	640.0	1057	
S43	第82図	G25グリッド 黄褐色土	敲石	安山岩	12.0	7.9	4.4	590.0	1085	
S44	第82図 PL.49	G25グリッド 黄褐色土	敲石	安山岩	11.4	6.4	4.2	430.0	1353	
S45	第83図 PL.48	E26グリッド 黒色土	敲石	安山岩	10.1	4.2	3.0	160.0	13	
S46	第83図 PL.48	G25グリッド 黄褐色土	敲石	安山岩	12.6	5.0	4.7	400.0	1452	
S47	第83図 PL.49	F25グリッド 黄褐色土	敲石	安山岩	15.0	8.0	4.8	800.0	276	
S48	第83図 PL.48	G25グリッド 黄褐色土	敲石	安山岩	11.15	6.6	4.4	540.0	1498	
S49	第84図 PL.48	F25グリッド 黄褐色土	敲石	安山岩	8.45	5.5	7.55	420.0	275	
S50	第84図	E26グリッド 黄褐色土	敲石	安山岩	7.1	6.6	4.3	280.0	2018	

(9) 絵画土器、土製品 (第86図、表25、PL.45)

226は長頸壺の頸部外面に絵画と思われるものが認められる。焼成前に鋭いもので刻み込まれた線刻で、意匠は不明である。谷部の黄褐色土から出土。

227は有孔の土玉である。四分の一程度に破損しているが、穿孔部が残っている。推定径2.9cm。鳥取市青谷上寺地遺跡では、土玉ひとつずつにヒノキの細枝を通して環状としたものが多数出土している(註2)。ここでは環状のものが積み重なって出土しており、いくつかまとめて使用された状況がうかがえ、土玉の本来の機能を示していると考えられる。今回の調査で出土した土玉はこの1点のみであり、土玉の機能をうかがわせる要素はない。

228、229は分銅形土製品。この土製品は完存して出土することは稀であるが、この2点もおよそ半分に欠損している。いずれも片面に刺突文様を施し、228は上縁から裏面にかけて穿孔する。228はS I 4、229はS I 1から出土した。

表27 遺構外出土石器観察表(2)

No.	挿図・PL	遺構・地区 層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取上No.	備考
S51	第84図 PL.48	G25グリッド 黄褐色土	敲石	安山岩	9.8	8.7	4.3	470.0	1664	
S52	第84図 PL.49	E26グリッド 黄褐色土	敲石	安山岩	14.8	15.2	6.7	2049.0	908	
S53	第85図 PL.48	G25グリッド 黄褐色土	磨石	安山岩	8.6	5.1	4	250.0	1476	
S54	第85図	G25グリッド 黄褐色土	磨石	安山岩	6.5	4.5	1.9	80.0	1702	
S55	第85図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	大型石包丁		7.6	6.25	1.4	70.0	302	
S56	第85図 PL.47	E28グリッド 暗褐色土	砥石		5.3	2.2	2.3	40.0	312	
S57	第85図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	砥石		4.7	1.9	1.4	19.2	1759	
S58	第85図 PL.46	E25グリッド 黄褐色土	砥石		4.9	4.0	1.8	48.2	903	
S59	第85図 PL.47	G25グリッド 黄褐色土	砥石		11.6	8.25	3.6	190.0	980・995	
S60	第85図 PL.46	F25グリッド 黄褐色土	砥石		7.6	5.6	3.1	150.0	664・1187	
S61	第85図 PL.47	G25グリッド 黄褐色土	砥石		11.2	3.3	3.6	180.0	1268	
S62	第85図 PL.45	G25グリッド 黄褐色土	石錘		9.1	4.3	4.0	160.0	176	

### (10) 石鏃製作関連資料（第87図、表28、PL.46）

今回の調査では、15点のサヌカイト製石鏃及びその未製品が出土している。また同じ石材の剥片や楔形石器も出土しており、これらは相互に関連するものと思われた。ここでは遺構内外出土の、こうしたものを一括して述べることにする。

第87図 S 63は、いわゆる石の目に沿って分割された板状の剥片である。分割面は極めて平坦となっている。S 64は下端に連続する剥離を加えて、刃部としている。スクレイパーと見ることも可能であるが、器体左側縁部の加工状況から、ここに抉りを入れようとしているのではないかと思われ、打製石庖丁と理解したい。全体の加工のあり方から完成品ではなく、半製品もしくは製作途中の破損品と考えられる。

S 65から S 67は、板状剥片等をさらに分割したと思われる剥片である。石の目に沿って割られた平坦面を有している。

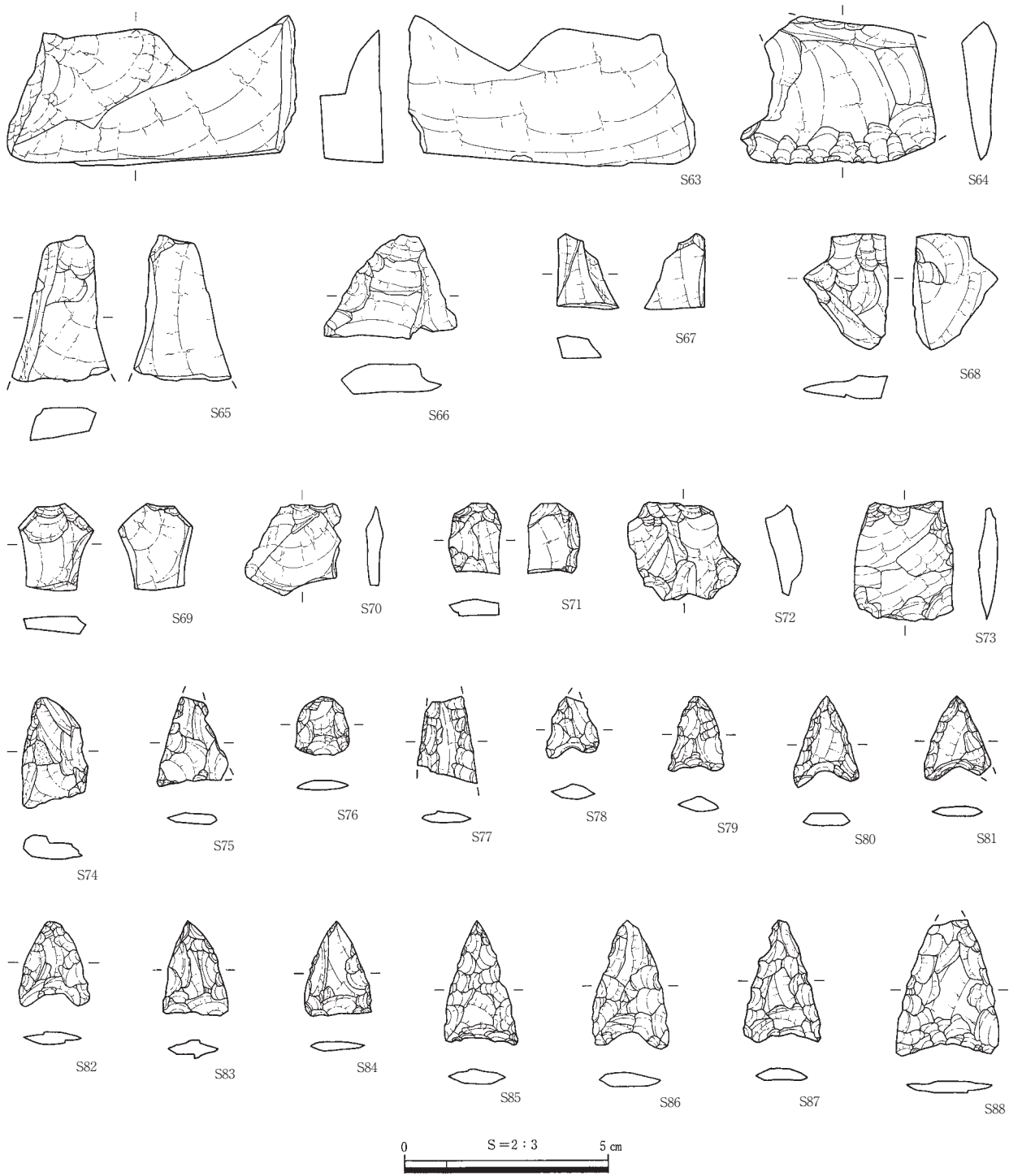
S 68から S 73は、いわゆる楔形石器である。台の上に固定し上から加撃する、両極剥離が加えられたもので、縁辺につぶれたような小剥離痕が見られる。器体中央に平坦面を有するものがあり、これらは前述の板状剥片を分割したものが素材となっていると思われる。両極剥離が進むと縁辺の表裏が細かく剥離されるため、S 73のような断面凸レンズ状に仕上がる。

S 74から S 78は石鏃の未製品。S 74、S 75は縁辺の調整剥離が加えられ始めた段階と考えた。S 76は調整剥離が周縁に及ぶが先端を尖らせておらず、脚部も未作出である。S 77は調整剥離を加えている段階で破損したものと思われる。S 78は右側縁に調整剥離が及んでいない。

S 79から S 88は石鏃の完成品。形態的には凹基式と理解できる。器体中央に平坦面を有することを基本とするので、板状剥片を素材としていることが分かる。

以上に述べた一連の資料から、サヌカイトの板状剥片または打製石庖丁の未製品などが素材として持ち込まれ、それらを分割したものに両極剥離を加え断面凸レンズ状にし、さらに縁辺を調整して石鏃を製作する工程が復元できる。

S I 1からは素材剥片 S 64、分割された板状剥片 S 67、両極剥離が加えられた S 71、石鏃未製品 S 76、S 77、S 78、石鏃 S 84と、すべての工程を示す資料が出土している。竪穴建物 S I 1で石鏃製作が行われていたことは間違いなからう。



第87図 石鏃製作関連資料

これらが出土した遺構はすべて弥生時代中期後葉である。包含層出土のものも、若干の例外はあるが遺跡全体の出土土器が基本的に弥生時代中期後葉であることから、同時期に位置づけられよう。平成17年度に調査した梅田萱峯遺跡1区も同じ時期の範疇で理解でき、石鏃製作関係資料が出土している（註3）。本遺跡では弥生時代中期後葉に石鏃製作が盛んに行われていたことが分かる。

これらサヌカイト製資料は、蛍光X線分析による産地推定を行っている（註4）。表33にも結果を示しているが、讃岐地方の金山産である可能性が高いという結果が出ている。具体的な入手ルートは不明ながら、遠隔地に産出する特定の石材を用い、一定の製作技法を駆使したシステマティックな石鏃製作が展開していたのである。

表28 石鏃制作関連資料観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区 層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取上No.	備考
S63	第87図 PL.46	SK1 埋土	板状剥片	サヌカイト	3.6	7.1	1.5	53.5	33・35	産地分析試料No14
S64	第87図 PL.46	SI1 埋土	打製石包丁	サヌカイト	4.8	3.55	0.85	14.6	452	産地分析試料No6
S65	第87図 PL.46	SI4 埋土	石鏃素材剥片	サヌカイト	3.60	2.4	0.8	7.9	825	産地分析試料No13
S66	第87図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	石鏃素材剥片	サヌカイト	2.6	3.20	0.8	6.4	1524	
S67	第87図 PL.46	SI1 埋土	石鏃素材剥片	サヌカイト	1.9	1.5	0.55	1.7	284	
S68	第87図 PL.46	SK1 埋土	石鏃素材剥片	サヌカイト	2.85	2.1	0.65	4.1	34	産地分析試料No15
S69	第87図 PL.46	SI2 埋土	石鏃素材剥片	サヌカイト	2.15	1.8	0.5	2.2	828	産地分析試料No11
S70	第87図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	石鏃素材剥片	サヌカイト	2.3	2.35	0.4	3.4	1275	
S71	第87図 PL.46	SI1 埋土	石鏃素材剥片	サヌカイト	1.70	1.3	0.4	0.7	284	
S72	第87図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	石鏃素材剥片	サヌカイト	2.4	2.70	0.9	4.3	1270	
S73	第87図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	石鏃素材剥片	サヌカイト	2.9	2.4	0.5	6.3	985	
S74	第87図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	石鏃未製品	サヌカイト	2.65	1.6	0.6	2.6	1197	
S75	第87図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	石鏃未製品	サヌカイト	2.20	1.75	0.3	0.9	1095	
S76	第87図 PL.46	SI1 埋土	石鏃未製品	サヌカイト	1.45	1.30	0.2	1.4	284	
S77	第87図 PL.46	SI1 埋土	石鏃未製品	サヌカイト	2.15	1.50	0.3	1.1	285	
S78	第87図 PL.46	SI1 埋土	石鏃未製品	サヌカイト	1.50	1.3	0.4	0.8	482	産地分析試料No8
S79	第87図 PL.46	F25グリッド 黄褐色土	石鏃	サヌカイト	1.85	1.45	0.4	0.9	924	
S80	第87図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	石鏃	サヌカイト	2.25	1.6	0.3	0.8	1156	
S81	第87図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	石鏃	サヌカイト	2.05	1.6	0.25	0.9	1748	
S82	第87図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	石鏃	サヌカイト	2.10	1.7	0.3	1.0	1337	
S83	第87図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	石鏃	サヌカイト	2.3	1.60	0.45	1.5	1080	
S84	第87図 PL.46	SI1 2層	石鏃	サヌカイト	2.35	1.65	0.2	1.1	470	産地分析試料No7
S85	第87図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	石鏃	サヌカイト	3.05	1.8	0.4	1.8	1081	
S86	第87図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	石鏃	サヌカイト	3.15	1.9	0.35	2.4	1280	
S87	第87図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	石鏃	サヌカイト	3.00	1.9	0.3	1.8	1927	
S88	第87図 PL.46	G25グリッド 黄褐色土	石鏃	サヌカイト	3.3	2.50	0.3	3.3	1768	

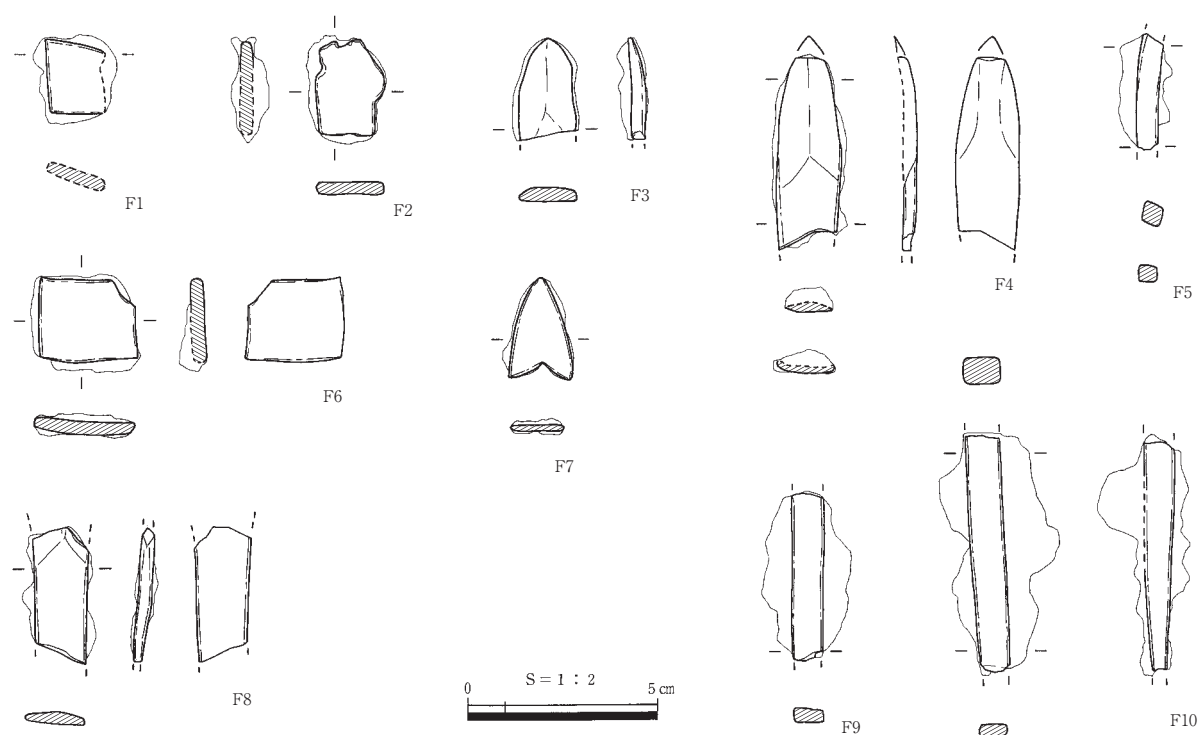
## (11) 鉄器（第88図、表29、PL.50）

鉄器は10点出土した。いずれも錆ぶくれしており、X線写真撮影を行ったものの、すべての器種を特定できたわけではない。

F 1とF 2はS I 1から出土した板状破片である。なんらかの鉄器の一部と思われる。F 3はS I 2出土のヤリガンナである。作業部位のみ残っており、鏑や裏すきについては定かでない。身に対して上反りとなる。F 4もヤリガンナで、身と先端を欠失する。鏑は明瞭である。S I 4から出土した。F 5はS S 1出土の棒状鉄器。方形の断面を持つ。F 6はS K 4出土の板状破片である。

F 7以下は遺構外出土の鉄器。F 7は凹基の三角形鏃である。鏑は認められない。F 8は扁平なもので、明瞭ではないが鏑が認められるため、ヤリガンナの身から作業部位にかけての破片ではないかと思われる。F 9は断面長方形の棒状鉄器。上下を欠失する。F 10も棒状を呈する。上方から下方に向かい厚みを減じる。鏑か鏧の可能性はある。

上記の鉄器が出土した遺構の時期はいずれも弥生時代中期後葉である。遺構外のものについても、本遺跡の土器のほとんどが弥生時代中期後葉であることから、その時期の鉄器の可能性が高い。平成17年度に調査した梅田萱峯遺跡1区では、調査面積の割には鉄器は4点と少ない。今回調査した3区は1区よりやや新しい集落と考えられ、鉄器普及のあり方を考えるうえで興味深い。



第88図 鉄器

表29 鉄器観察表

No	挿図・PL	遺構・地区 層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取上No	備考
F1	第88図 PL.50	S11 1層	鉄器片	1.9	1.6	0.35	8.7	509	
F2	第88図 PL.50	S11 埋土	鉄器片	2.5	1.8	0.35	4.9	285	
F3	第88図 PL.50	S12 埋土	鏃	2.7	1.5	0.35	0.04	828	
F4	第88図 PL.50	S14 床直	鏃	5.1	1.7	0.4	6.5	661	
F5	第88図 PL.50	SS1 3層	棒状鉄器	3.05	0.6	0.6	△5.2	1884	
F6	第88図 PL.50	SK4 埋土	鉄器片	2.55	2.2	0.35	8.4	64	
F7	第88図 PL.50	G26 暗褐色土	鉄鏃	2.65	1.7	0.0	2.6	47	
F8	第88図 PL.50	G25 黄褐色土	鏃?	3.6	1.55	0.4	4.7	952	
F9	第88図 PL.50	G25 黄褐色土	棒状鉄器	4.4	0.9	0.4	15.0	925	
F10	第88図 PL.50	G25 黄褐色土	鏃	6.20	0.9	0.8	25.2	1605	

註2) 北浦弘人編2001『青谷上寺地遺跡3』(財)鳥取県教育文化財団

湯村 功編2002『青谷上寺地遺跡4』(財)鳥取県教育文化財団

3) 高尾浩司・浅田康行編2007『梅田萱峯遺跡1』鳥取県埋蔵文化財センター

4) 第5章第2節参照。